法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-12

考証　ポーの「うずまき」

宮永, 孝 / MIYANAGA, Takashi

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
社会志林 / Hosei journal of sociology and social sciences
(巻 / Volume)
70
(号 / Number)
4
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
73
(発行年 / Year)
2024-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00030540

考証　ポーの「うずまき」

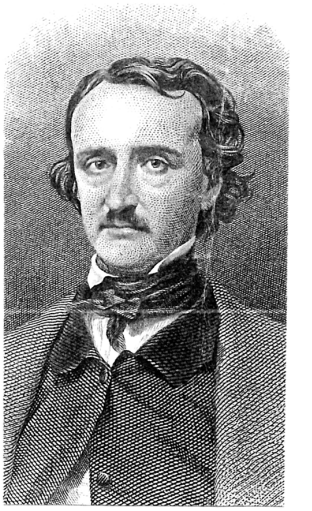
宮永　孝

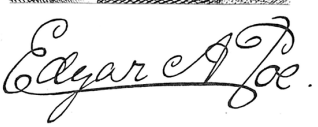
はじめに
一　Maelstrom の語源
二　「うずまき」の源泉（材源）と同作品の影響
　――『ブリタニカ百科事典』（一七九八年版）にみる「うずまき」の記事（その邦訳）
三　「うずまき」とはどんな物語か。その大筋
四　文体からみた「うずまき」の構造と特徴
五　明治・大正・昭和期の「うずまき」の翻訳小史
六　日本の古詩（和歌）俳句　随筆にあらわれた「鳴門のうずまき」
七　「うずまき」の発生原因
八　「うずまき」からみたポーの伝言
　むすび
　英文レジュメ（Abstract in English）

はじめに

エドガー・アラン・ポー（一八〇九～四九）は、十九世紀のアメリカ文学を代表する文学者である。かれは生前、詩人・批評家・物語作家として活躍し、みじかい生涯をおえた。ことしはポー没後一七〇年余になる。ポーの生涯を顧みたとき、その生きざまは貧困と挫折、脳乱のくり返しであり、その長い漂泊の旅はボルチモアでおわった。

ポー伝のしるすところによると、かれは旅役者の子に生まれた。父ディヴィッドは法学士になるはずであったが、いつか転身し、役者になった。母はアーノルドといい、これも役者であり、夫婦そろって南部諸州の巡業をつづけたが、役者として、大して成功はしなかったようだ。この夫婦





ポーとその署名

に子供が三人できた。

長男　ウィリアム・ヘンリー・レオナード……一八〇七年ボストン生まれ。
次男　**エドガー（本稿の主人公）**……一八〇九年ボストン生まれ。
妹　ロザリー……一八一〇年バージニア州ノーフォーク生まれ。

一八〇九年の夏、一家がニューヨークにいたとき、父ディヴィッドは、妻子をすてて行方をくらましたらしい。母は子どもらを連れて、バージニア州のノーフォーク、サウスカロライナ州のチャールストン、バージニア州のリッチモンドなどを巡業していたが、一八一一年の冬、身を寄せていたスコットランド人の婦人帽製造者の家で、病により亡くなった。三人の遺児は、それぞれリッチモンドの慈善家に引きとられた。

エドガーは、かなり裕福なスコットランド出身のタバコ商人ジョン・アラン（一七八〇～一八三四）に引きとられた。その後町の私立学校をへて、バージニア大学へ進んだが（一八二六・二）、仕送りがじゅうぶんでなく、やがて飲酒・バクチをはじめるようになり、養父とあらそい廃学すると、ノーフォークから海路ボストンへむかった（一八二七・四）。ボストンでは新聞雑誌むきの記事をかいて生活費をえようとしたが、うまくゆかず、生活苦のため、やむなく合衆国陸軍に一兵卒として入隊し（一八二七・五）、ボストン港内の砦、南カロライナ州のムールトリー砲台、バージニア州モンロー砦などに勤務し、階級も特務曹長にまで進んだ（一八二九・一）。

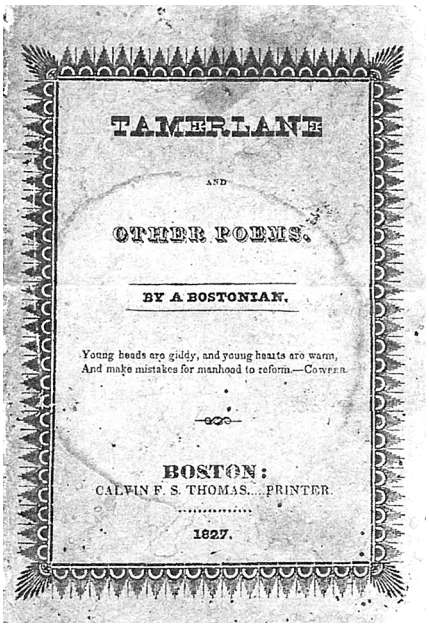
のちポーは、アラン夫人の遺言のおかげで義父と和解すると、陸軍士官学校（ウェストポイント）の試験をうけ、入学した（一八三〇）。が、かっての私行をアラン家に中傷する者がいて、それがもとで義父との関係がふたたび悪化した。やがてポーは、軍務をおこたるようになり、放校処分をうけた（一八三一）。

失敗つづきの人生、社会の落伍者となったポーの心は、暗闇にとざされた。生きてゆくためには、日々の糧をえねばならぬ。かれが運命にいどもうとしたのは、新聞雑誌に筆をとり、文筆によって生きることであった。すでにわずかながらも、つぎのような作品（詩集）を世に問うていた。

『タマレーンその他の詩』（ボストンのカルヴィン・トマス社、五〇部限定、一八二七年）
『アル・アーラーフ・タマレーンおよび小詩集』（ボルチモアのハッチ・アンド・ダニング書店、一八二九年）
『詩集』（ニューヨーク、一八三一年）

窮乏と飢えに迫られていたポーに、幸運の光がさした。ボルチモアの週刊雑誌『サザン・リテラリー・メッセンジャー』の所有者が懸賞募集をした。一つは最良の詩に二五ドル、もう一つは最良の短篇に五〇ドルをあたえるというものであった。審査員のジョン・P・ケネディは、ポーの原稿「ビンから出た草稿」「うずまきに呑まれて」（本稿では以下**「うずまき」**とする）に嘱目し、「ビンから出た草稿」を入選作とした。ポーは償金五〇ドルをえた。ケネディは同誌の創立者にポーを紹介し、編集者として採用してもらった。ときにポーは二十四歳であった。かれはこの雑誌に、詩・エッセイ・批評・短篇などを寄稿した（一八三五～三七）。

やがて父方のいとこのバージニア・クレム（十三歳）と結婚し（一八三六・五）、その母クレム夫人とともにニューヨーク・フィラデルフィアを転々とし、著述によってわずかの糧をえた。その後、つぎのような雑誌社につとめたが、しごとにむらがあったり、飲酒癖やいさかいからいずれも長つづきしなかった。


TAMERLANE
AND
OTHER POEMS.
BY A BOSTONIAN.
Young heads are giddy, and young hearts are warm,
And make mistakes for manhood to reform.—Cowper.
BOSTON:
CALVIN F. S. THOMAS....PRINTER.
1827.

ポーの処女作『タマレーンその他の詩』（1827年，ボストン刊）の表紙

フィラデルフィアの『バートンズ・ジェントルマンズ・マガジン』（一八三九～四〇）
『グレアムズ・マガジン』（一八四一～四二）
＊「うずまき」は、同誌に掲載された（一八四一・五）。
ニューヨークの『ブロードウェー・ジャーナル』（一八四五～四六）

フィラデルフィアやニューヨークにおける暮らしは楽でなく、相変らずの貧乏ぐらし、そのいたましい生活の最高潮は最愛の妻バージニアの肺病によ

1875年（明治８）11月17日におこなわれたポーの墓の除幕式
（ボルチモアーウエストミンスター教会墓地）
Mary E.Phillips 著 E・A・Poe the Man,vol. II より。

る死であった（一八四七・一・三〇）。ポーもまたその死によって打ちのめされ、アルコール依存症となり、さいごはボルチモアにおける乱酔の結果、路上で発見され、病院にはこばれると、アルコール中毒による振せん譫妄症（錯乱）によって亡くなるのである（一八四九・一〇・七）。母クレム夫人とその娘バージニア、ポーら三人の生涯は、寄るべなく、運命と偶然に身をゆだねた一生であったといえる。

かくしてポーは、流星のごとくこの世に現われ、光芒一閃――さっとひらめいてこの世から消えて行ったのである。が、その命のあかしともいうべき一連の珠玉の名編は、こんにち各国において読みつがれている。筆者はむかしポーの「うずまき」（*A Descent into the Maelström*――一八四一・五）と題する短篇をよんだとき、“Maelström”（ノルウェー北西岸沖のうずまきの意）という単語に興味をもったことがある。いまから五〇年以上もまえのことである。

物語は漁に出たノルウェーの漁夫三名が、大うずに巻き込まれ、うち一人だけが〝水たる〟にしがみついたおかげで九死に一生をえ、海底から海面に浮びあがり、仲間の漁船によって助けられる話である。ノルウェーの一漁夫のこの異常な体験――引力の法則を実体験しながら、うずまきの底を見た男は、ある日語り手となって、知人を〝うずまき〟がみえる高い崖に案内すると、腹ばいになってみずからの実体験をかたる。

ポーのことを剽窃者と呼んだ評者もいたようだが、ものを書く人間は多かれ少なかれ、剽窃者である。人が書いたものを利用し、盗作まがいのものを書いているからである。偉ぶったことをいってみても、じっさいひとは他人にたより、他人が書いたものに依存し、物を書いているにすぎない。ポーの創造的技巧のなかに材源があり、この作品を構成する一つの材料は、『ブリタニカ百科辞典』*Encyclopaedia Britannica*（一七九七～一八三六、第三版～六版）であることは、学者の指摘をまつまでもなく、ポーみずから同百科辞典に言及し、その記事をじぶんの作品に引用していることからもわかる。

筆者は『ブリタニカ百科辞典』にある‘Maelstrom’の記事に接する機会はこれまでなかったが、先頃司書をわずらわせて原文と接することがで

き、五十数年ぶりではじめてよむことができた。〝マエルストロム〟の項目の執筆者については不明だが、記事のおよそ半分以上は、ノルウェーの牧師兼著述家ジョナス・ラムス（一六四九～一七一八）の文章からの引用である。

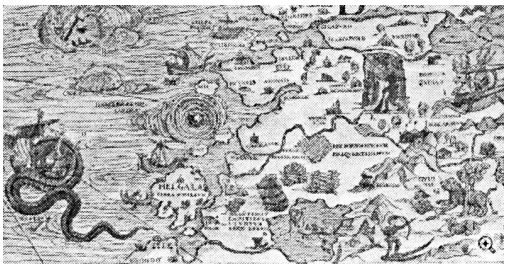
筆者が本稿において論題（研究テーマ）とするものは、

一　Maelstrom の語源
二　「うずまき」の源泉（材源）と同作品の影響
三　『ブリタニカ百科辞典』（一七九八年版）にみる「うずまき」の記事（その邦訳）。
四　「うずまき」とは、どんな物語か。その大筋
五　文体からみた「うずまき」の構造と特徴
六　明治・大正・昭和期の「うずまき」の翻訳小史
七　日本の古詩（和歌）　俳句　随筆にあらわれた「鳴門のうずまき」
八　うずまきの発生原因
九　「うずまき」からみたポーの伝言

などである。

いま英独仏蘭の主要な辞書にみられる「うずまき」の見出し語をみると、つぎのようになっている。

（英）maelstrom（meilstrəm）*……『オクスフォード英語辞典』The Oxford English Dictionary（俗にＯＥＤという。）
（独）malstrom……『ブロックハオス　バーリヒ　ドイツ語辞典』Brockhaus Wahrig Deutsches Wörterbuch, F.A. Brockhaus, 1982
（仏）Maelström（malstrøˈm）……『ル・グラン　ロベール　フランス語辞典』Le Grand Robert de la Langue Française, Le Robert, 1985
（蘭）maalstroom……『ファン・ダレのオランダ語大辞典』*Van Dale's* Groot Woordenboek der Nederlandsche Taal, Martinus Nijhoff en A. W. Sijthoff's Uitgevers, 'S-Gravenhage en Leyden, 1914



オラウス・マグヌスが描いた‘うずまき’。Carta Marina（1539年製）にのったもの。

写真の中央にある＋のところが‘大うずまき’の絵。メルカトルの『アトラス』（1595）年より。British Library 蔵。

ヘラルドゥス・メルカトル

＊（　）内は発音記号を示す。

Ⅰ　Maelstrom の語源

語源欄でいちばんすぐれている英語の辞書は、O・E・D（＝OED）である。それを参考として maelstrom（メイルストロム）の起源的いみ（語源）をしるすと、つぎのようになる。

初期近代オランダ語に maelstrom という語があるという。同語はいま maalstrom（マールストロム）とつづっている。‘うず巻（ホワールプール）’の意である。オランダ語の *malen*（マレン）は、粉をひいたり、うずを巻くことを意味する。ひとが maelstrom を固有名詞として使いはじめたのはいつのことか。‘うずまき’のさし絵を地図にはじめて書き入れたのは、オラウス・マグヌス（一四九〇～一五五八、スウェーデンの旧教の牧師兼史家）であろうか。かれの *Carta Marina*（「海図」、一五三九年製）に‘帆船を巻き込んだうずまき’の図がみられる。*Maelstrom* の語は十六世紀にはやくも姿をみせるのである。ヘラルドゥス・メルカトル（一五一九～九四、オランダの地理学者）の『アトラス』（地図帳――一五九五（文禄4）年）に同語があるといい、「オランダの言語学者の意見によると、この語はその土地に生まれたものという」（OED, vol.IX, 1959）。

念のため、メルカトルの地図をみると、‘マールストロム’の語がみられるが、つづりがいまのものとだいぶ違っており、

Muſkoſtrom

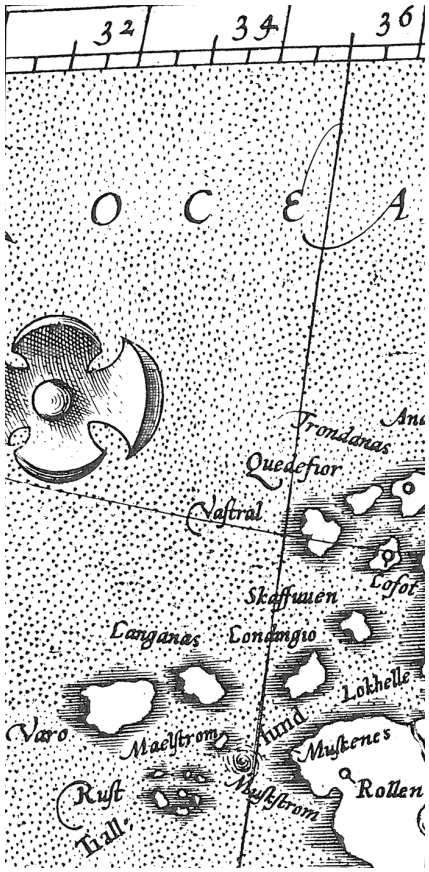
となっている。この語は‘ムスコストロム’とでも読むべきものか、また何語なのかも不明である。

メルカトルの北極圏の地図には、Vaſhul 島と Lõganas 島の中間に大きな‘うずまき’の絵が添えられている（写真参照）。この大うずが描かれている地方は、いまのノールラント(ド)州であり、その中の小島であろう。

筆者がみたもう一つ別種のメルカトルの『アトラス』――そこにみられる北極圏の地図（「隣接するスウェーデンとノルウェー」Svecia et Norvegia cum conſinys と題するものにも、‘うずまき’の絵が添えられている。が、位置が前者と異なる。本土の Muſkenes と――Fund 島――Varo 島――Ruſt――Tiall 諸島にかこまれた地点である。地理学的にいえば、北緯67～68度、西経34～36度のあたりである（写真を参照）。

その‘うずまき’のつづりは、Maelſtrom または Muſkſtrom となっている。この海域では、あちこちで‘うずまき’が起っている。

Maelstrom の語は、普通名詞として現代の北欧語の中にみられるという。が、この語はただ文学的に使用されているにすぎない。デンマークの



Maelſtrom と Muſkſtrom との間に‘うずまき’の絵がみられる。メルカトルの『アトラス』（1595年）の異本より。

FÆROÆ
Et
FÆROA RESERATA
Det er:
Færøernis
Og
Færøeske Indbyg-
geris Beskrifvelse / udi hvil-
ken føris til Liuset adskillige Natu-
rens Hemeligheder / og nogle Antiqvite-
ter, som her til Dags udi Mørcket hafve
været indelugte / og nu her opladis /

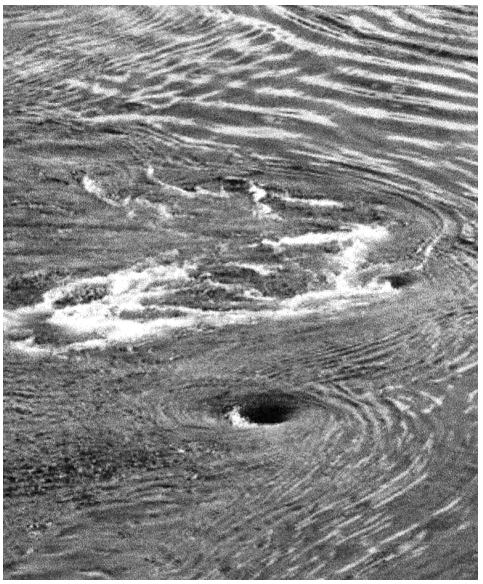
ルーカス・ヤコブソン・ドゥベスが著わしたフェロー諸島についての最古の本

ノルウェーの西海岸沖に発生する‘うずまき’。Søk i Stone norske leksikon より。

学者は、同語をオランダ語もしくは低地ドイツ語（ドイツ北部低地方のオランダ語と似た方言）からの借用語とみている。OEDは、また最も古いデンマーク語のつづりとして、*malstrom* または *malestrøm* を掲げているが、これらの語はフェロー（ヴァロイ）諸島の教区牧師兼作家であったルーカス・ヤコブソン・ドゥベス（一六二三〜七五）が著わした *Færoa reserata*（1673）にみられるという。

スウェーデン語では *malström* といい、フェロー語（ゲルマン語派の一つ）に *mal(u)streymur* という語があるが、*mala* は粉をひいたり、うずを巻くことの意味だという。こんにち *maelstrom*（英）といえば、ノルウェーの西海岸の北極海にみられるうずまきのことをいい、かっては船を吸い込み、破壊するものと考えられた。

OEDは、また‘うずまき’が出てくる例文を掲げている。



モスケン島周辺のうずまき

アンソニー・ジェンキンソン（一五二九～一六一〇、一六～一七世紀のイギリスの商人、旅行家）……「ハクルートの航海記」（一五八九年）。
――前述の Rost Islands と Lofoote 島のあいだに Malestrand と呼ばれるうず巻がある。それは恐しいほどの音をたてるために、上述の諸島の人家のドアのベルを鳴らすほどである。

R・バートン（一五七七～一六四〇、イギリスの聖職者）……*Wond. Curios*（一六八四年）。
――Cathness と Orkney との海岸の間に、恐ろしい入江または湾がある。その北の端において、九つの逆流が交わるために、Male Stream または大うずが生じる。

C・ウーリィ……*Jrnl. New York*（1860）。
――危険な潮流……ノルウェーのうず巻――すなわち Mael-strom ほど危険かつふしぎなものはない。

エリック・ポントピダン（一六九八～一七六四、ベルゲンの牧師兼作家）……『ノルウェーの自然誌』（一七五五年）。
――ノルウェーの海にもう一つ潮流がある。……すなわち Malestrom もしくは Moskoestrom が……モスコエ島の近くに（Sect.X）。

ポー……「うずまきに呑まれて」A Descent into the Maelström（1844）

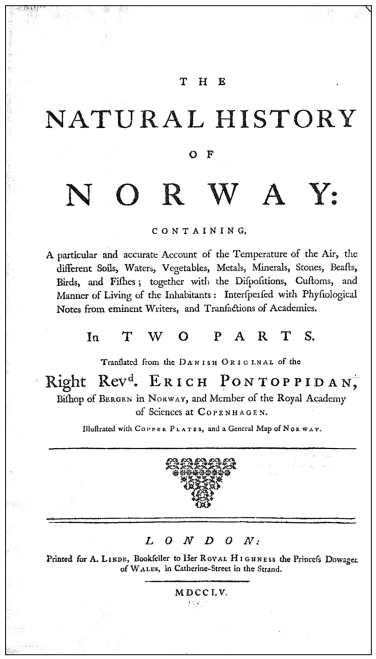
いまの北欧語の中に、つぎのような〝うずまき〟の語名をみいだすことができる。

ノルウェー語……malstrøm（メルストロム）
スウェーデン語……malström（マルストロム）

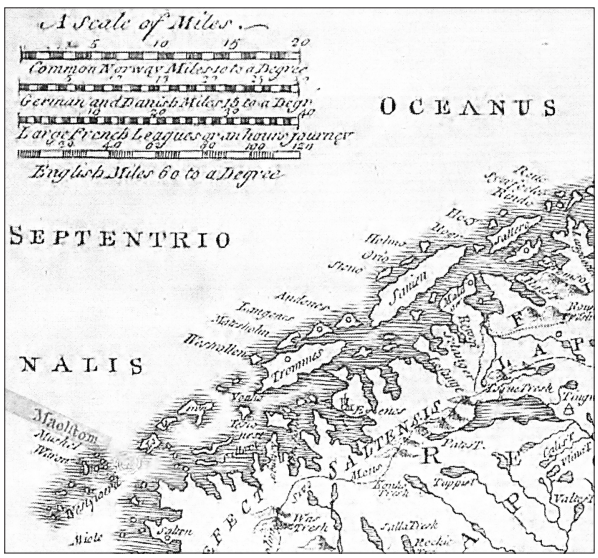
デンマーク語……malstrøm（マルストロム）

こんにちノルウェーの〝うずまき〟といえば、――ロフォーテン（ラテ）諸島中のモスケン島（無人島）周辺海域における強い潮流の産物の意であり、Moskenstraumen（モスケンスラウメン）（〝モスケンのうずしお〟）の異称もある。うずまきはどのようにして発生するのか、そのしくみについて述べてみよう。

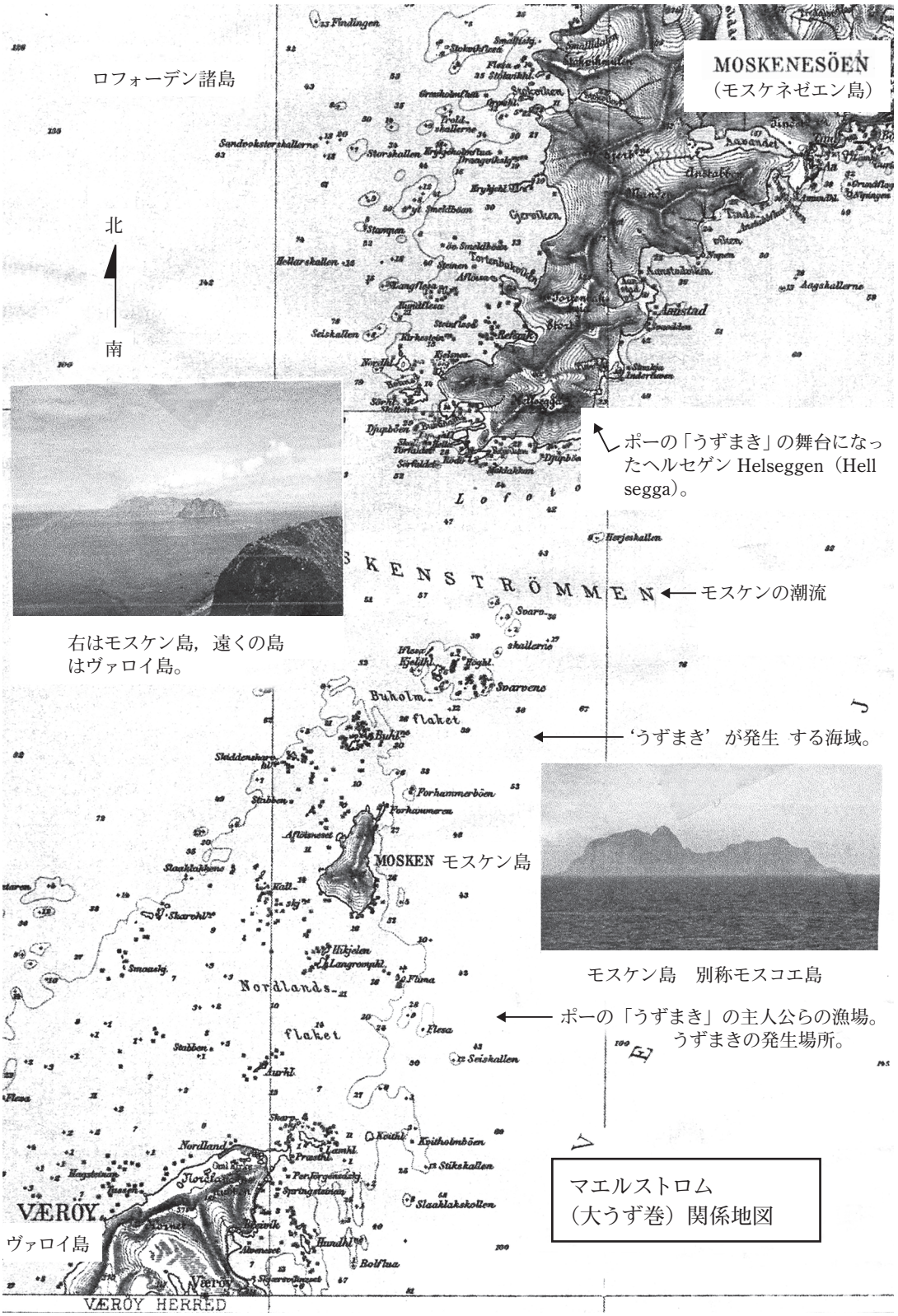
海水は潮の満ちひきばかりか、風や地球の自転などにより、たえず動いている。潮流は水の水平運動によって起ったもので、岬の周辺、島と島との間、河口付近では流れがつよい。潮のつよさ、方向は時間単位によって変化し、そのとき〝うず巻〟が発生する。


THE
NATURAL HISTORY
OF
NORWAY:
CONTAINING,
A particular and accurate Account of the Temperature of the Air, the different Soils, Waters, Vegetables, Metals, Minerals, Stones, Beasts, Birds, and Fishes; together with the Dispositions, Customs, and Manner of Living of the Inhabitants: Interspersed with Physiological Notes from eminent Writers, and Transactions of Academies.
In TWO PARTS.
Translated from the DANISH ORIGINAL of the
Right Revd. ERICH PONTOPPIDAN,
Bishop of BERGEN in NORWAY, and Member of the Royal Academy of Sciences at COPENHAGEN.
Illustrated with COPPER PLATES, and a General Map of NORWAY.
LONDON:
Printed for A. LINDE, Bookseller to Her ROYAL HIGHNESS the Princess Dowager of WALES, in Catherine-Street in the Strand.
MDCCLV.

エリック・ポントピダンの『ノルウェーの自然誌』（1755年）の表紙



『ノルウェーの自然誌』にのった〝Maelstrom〟。

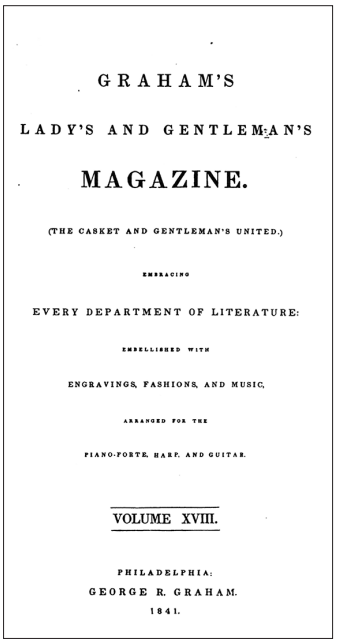

ロフォーデン諸島
MOSKENESÖEN
（モスケネゼエン島）
北
南
ポーの「うずまき」の舞台になったヘルセゲン Helseggen（Hell segga）。
SKENSTRÖMMEN
モスケンの潮流
右はモスケン島，遠くの島はヴァロイ島。
Buholm-flaket
‘うずまき’が発生 する海域。
MOSKEN モスケン島
モスケン島　別称モスコエ島
Nordlands-flaket
ポーの「うずまき」の主人公らの漁場。うずまきの発生場所。
VÆRÖY
ヴァロイ島
VÆRÖY HERRED
マエルストロム
（大うず巻）関係地図

二　「うずまき」の源泉（材源）と同作品の影響

――『ブリタニカ百科辞典』（一七九八年版）にみる「うずまき」の記事（その邦訳）

ポーは何をネタにして、この短篇を書いたのか。この問にたいしては、トマス・オリーブ・マボット編『エドガー・A・ポー著作集　物語とスケッチ　一八三一～四二年』（ハーバート大学出版　ザベルクナッププレス、一九七八年）に収録されている「うずまきに呑まれて」（「うずまき」）の「注」がくわしく、回答のヒントを与えてくれる。またアーリン・ターナー（ルイジアナ州立大学）の小論「ポーの『うずまき』の材源」（一九四七年）も、有益な情報をあたえてくれるすぐれた研究である。

「うずまき」が、紙上にはじめて姿をみせたのは、『グレアムズ　マガジン』（一八四一（天保12）・五）であった。これはポーの作品のなかでも秀作の一つであり、差し迫った危険にたいして、読者をして息をのませるものである。が、原文の真に迫った描写は、たよりない英語力をもつ日本人には、



GRAHAM'S

LADY'S AND GENTLEMAN'S

MAGAZINE.

(THE CASKET AND GENTLEMAN'S UNITED.)

EMBRACING

EVERY DEPARTMENT OF LITERATURE:

EMBELLISHED WITH

ENGRAVINGS, FASHIONS, AND MUSIC,

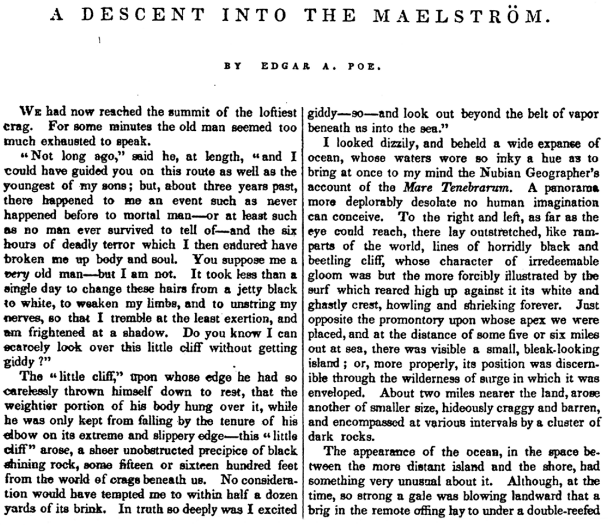
ARRANGED FOR THE

PIANO-FORTE, HARP, AND GUITAR.

VOLUME XVIII.

PHILADELPHIA:
GEORGE R. GRAHAM.
1841.

ポーの「うずまき」が掲載された
『グレアムズ・マガジン』（1841年）



A DESCENT INTO THE MAELSTRÖM.

BY EDGAR A. POE.

We had now reached the summit of the loftiest crag. For some minutes the old man seemed too much exhausted to speak.

"Not long ago," said he, at length, "and I could have guided you on this route as well as the youngest of my sons; but, about three years past, there happened to me an event such as never happened before to mortal man—or at least such as no man ever survived to tell of—and the six hours of deadly terror which I then endured have broken me up body and soul. You suppose me a very old man—but I am not. It took less than a single day to change these hairs from a jetty black to white, to weaken my limbs, and to unstring my nerves, so that I tremble at the least exertion, and am frightened at a shadow. Do you know I can scarcely look over this little cliff without getting giddy?"

The "little cliff," upon whose edge he had so carelessly thrown himself down to rest, that the weightier portion of his body hung over it, while he was only kept from falling by the tenure of his elbow on its extreme and slippery edge—this "little cliff" arose, a sheer unobstructed precipice of black shining rock, some fifteen or sixteen hundred feet from the world of crags beneath us. No consideration would have tempted me to within half a dozen yards of its brink. In truth so deeply was I excited giddy—so—and look out beyond the belt of vapor beneath us into the sea."

I looked dizzily, and beheld a wide expanse of ocean, whose waters wore so inky a hue as to bring at once to my mind the Nubian Geographer's account of the *Mare Tenebrarum*. A panorama more deplorably desolate no human imagination can conceive. To the right and left, as far as the eye could reach, there lay outstretched, like ramparts of the world, lines of horridly black and beetling cliff, whose character of irredeemable gloom was but the more forcibly illustrated by the surf which reared high up against it its white and ghastly crest, howling and shrieking forever. Just opposite the promontory upon whose apex we were placed, and at the distance of some five or six miles out at sea, there was visible a small, bleak-looking island; or, more properly, its position was discernible through the wilderness of surge in which it was enveloped. About two miles nearer the land, arose another of smaller size, hideously craggy and barren, and encompassed at various intervals by a cluster of dark rocks.

The appearance of the ocean, in the space between the more distant island and the shore, had something very unusual about it. Although, at the time, so strong a gale was blowing landward that a brig in the remote offing lay to under a double-reefed

ポーの「うずまき」

とうてい味うことのできぬものである。『エドガー・A・ポー著作集』（四巻）を編んだジョン・H・イングラムの「回想録（メムワー）」に、「一八四二（ママ）年『うずまき』が姿をみせた。これは多くの点で、ポーの驚くべきかつ特有の作品の一つとみられる物語である」（vol.1, xlii）といった記述があり、ポーの絶妙の筆力を絶賛している。

また『ズィ・アリスティディーン』誌において「ポーの物語（テイルズ）」を批評した記事（一八四五・一〇）の中に、こんな文章があるという。「『うずまき』は何よりもテーマの大胆さをもって有名である。このようなテーマはだれも思いつかなかったもの、また描写が明快であることでも知られている。」。

「うずまき」の源泉（材源）についての研究は、アメリカの研究者（キリス・キャンビル、アーリン・ターナー、トマス・オリーブ・マボットその他）の独壇所の感があり、外国の研究者がすき入る余地はきわめて少ない。否、ほとんど立ち入るすきがないといえる。

キリス・キャンベルは、「ポーは物語を数篇かくために、百科辞典において見つけた材料を利用した。『うずまき』を書くために、重要な細部を『ブリタニカ百科辞典』の初期の版から借用した」というし（Kilis Campbell: *The Mind of Poe and Other Stories*, Harvard Univ. Press, 1933, p. 173）、アーリン・ターナーは、「うずまき」の物語がはじまって数ページ先で、「これらは同百科辞典のことばである」といい、ポーがこの百科辞典に恩義を感じていることを指摘している。『ブリタニカ百科辞典』の〝うずまき〟の記事によって、ポーは、じぶんが必要とする

㈠　地理学上の情報

㈡　叙景的な文章をよりくわしく叙するために必要な細部

などを入手することができた。が、主人公がうずまきから生還する手段（すべ）については、何の暗示もうけなかった（アーリン・ターナー）。

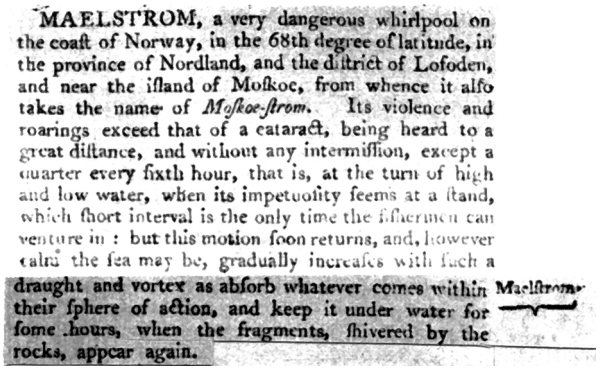
ポーが源泉（材源）とした主なものは、

㈠　『ブリタニカ百科辞典』

㈡　定期刊行物（雑誌など）

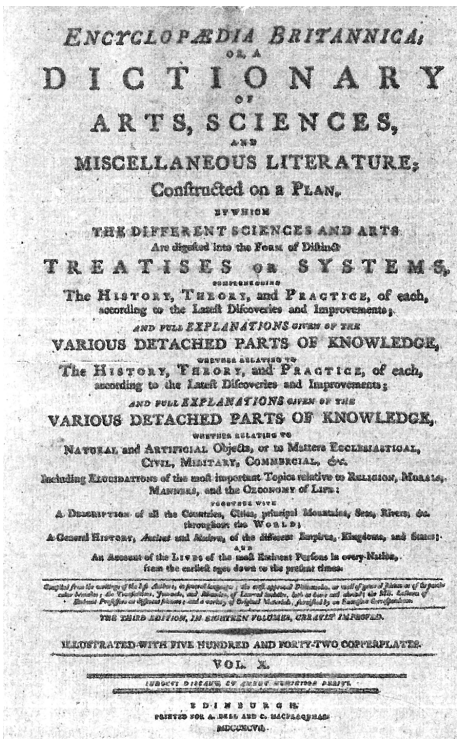
などに見られる記事であった。これらの参考図書のうち、雑誌類は社の編集部（局）にあるものを利用し、また専門的な書物は図書館などでよみ、メモにとったものらしい。

ところでポーが霊感をうけた記事の一つ――『ブリタニカ百科辞典』（一七九八年）の「うずまき」の冒頭は、つぎのような文章ではじまるが、以下、全文を和訳したもの（大意）を掲げると、つぎのようになる。


MAELSTROM, a very dangerous whirlpool on the coaſt of Norway, in the 68th degree of latitude, in the province of Nordland, and the diſtrict of Loſoden, and near the iſland of Moſkoe, from whence it alſo takes the name of *Moſkoe-ſtrom*. Its violence and roarings exceed that of a cataract, being heard to a great diſtance, and without any intermiſſion, except a quarter every ſixth hour, that is, at the turn of high and low water, when its impetuoſity ſeems at a ſtand, which ſhort interval is the only time the fiſhermen can venture in: but this motion ſoon returns, and, however calm the ſea may be, gradually increaſes with ſuch a draught and vortex as abſorb whatever comes within their ſphere of action, and keep it under water for ſome hours, when the fragments, ſhivered by the rocks, appear again.

Maelſtrom

『ブリタニカ百科辞典』（1798年版）にみられる，メイルストローム（うずまき）の記事


ENCYCLOPÆDIA BRITANNICA;
OR, A
DICTIONARY
OF
ARTS, SCIENCES,
AND
MISCELLANEOUS LITERATURE;
Conſtructed on a PLAN,
BY WHICH
THE DIFFERENT SCIENCES AND ARTS
Are digeſted into the Form of Diſtinct
TREATISES OR SYSTEMS,
CONTAINING
The HISTORY, THEORY, and PRACTICE, of each,
according to the Laſteſt Diſcoveries and Improvements;
AND FULL EXPLANATIONS GIVEN OF THE
VARIOUS DETACHED PARTS OF KNOWLEDGE,
WHETHER RELATING TO
The HISTORY, THEORY, and PRACTICE, of each,
according to the Laſteſt Diſcoveries and Improvements;
AND FULL EXPLANATIONS GIVEN OF THE
VARIOUS DETACHED PARTS OF KNOWLEDGE,
WHETHER RELATING TO
NATURAL and ARTIFICIAL Objects, or to Matters ECCLESIASTICAL,
CIVIL, MILITARY, COMMERCIAL, &c.
Including ELUCIDATIONS of the moſt important Topics relative to RELIGION, MORALS,
MANNERS, and the ŒCONOMY of LIFE:
TOGETHER WITH
A DESCRIPTION of all the Countries, Cities, principal Mountains, Seas, Rivers, &c.
throughout the WORLD;
A General HISTORY, Ancient and Modern, of the different Empires, Kingdoms, and States:
AND
An Account of the LIVES of the moſt Eminent Perſons in every Nation,
from the earlieſt ages down to the preſent times.
THE THIRD EDITION, IN EIGHTEEN VOLUMES, GREATLY IMPROVED.
ILLUSTRATED WITH FIVE HUNDRED AND FORTY-TWO COPPERPLATES.
VOL. X.
EDINBURGH:
PRINTED FOR A. BELL AND C. MACFARQUHAR
MDCCXCVIII.

『ブリタニカ百科辞典』（10巻，1798年版）の表紙。
版元は A. Bell and C. Mactarguhar 社。

大うず（メエイルストロム）

これはノルウェーの沿岸で起るたいへん危険なうずまきのことである。緯度は（北緯）六八度、ノールトラント州（県）のロフォーデン地区――モスコエ島のちかくで発生する。そのため〝モスコエ・ストロム〟とも呼ばれている。そのうず巻のはげしさととどろきは、瀑布（ばくふ）のそれをもしのぎ、遠くでも聞こえるほどである。そして六時間十五分ごとに、すなわち、海の干満（かんまん）のとき、中断することなく生じる。そのときうずまきの激しさはやむようだ。

そのみじかい休止時間こそ、漁夫が思いきって進むことができるときである。が、ほどなく潮がうごきだす。海はどんなにおだやかであっても、しだいに吸引力とうずが大きくなると、その行動領域に入ってくるものは何でも吸収するようになる。そして吸いあげたものを何時間も水のなかに閉じ込めておく。岩によってばらばらになると、再び姿をみせる。

とりわけこのような状況から、キルヒャー（一六〇一～八〇、ドイツのイエズス会士、考古学者）やその他の人たちの説とは大いに異ることになる。かれらの考えによると、その地点に地球を貫らぬくような深みがあって、どこか遠い所に流れ出ているというのである。その場所を特定するほどキルヒャーは詳細をきわめている。なぜならそこはボスニア湾（引用者注・スウェーデンとフィンランドの間のバルト海の湾）だといっているからである。しかし、事情がゆるすかぎり、厳密に研究してみた結果、この説は何の根拠もない憶測にすぎないことがわかった。

なぜならフェロエ（ヴァロイ）諸島のこのうずまきやその他の三つのうずは、もっと小さなものであるが、潮の干満時に、岩塊や岩礁の頂上で、上下する波がぶつかることが原因で生じるものである。波のうね（波がしら）は、水を滝のように落下させるように閉じ込める。だから上げ潮が増すにつれて、落下もはげしくなるに違いない。落下の自然な成行きは、うずまきである。そのおどろくべき吸引力については、ちょっと実験してみればよくわかる。

しかし、このようにして吸い込んだものは、潮が引いているとき、もう海底に残っていないのである。なぜなら、そのとき吸引はやんでおり、満潮（みちしお）はいっさい引力をなくし、沈んでいるものは何でも再び浮上させるからである。モスコエ・ストロムのこの驚くべき状況については、ジョナス・ラムス（引用者注・一六四九～一七一八、コペーハーゲン大卒、牧師兼著述家）のつぎのような解説がある。――ロフォーテン（デ）の〝ヘルセーゲンの山は、ヴェル（ヴァロイ）島から一リーグ（引用者注・英米で約三マイル［約4.8キロ］）のところにある。この二つの間をモスコエ島の方から〝モスコエ・ストロム〟と呼ばれる大きな、恐ろしい海流がながれている。

モスコエ島は周辺のいくつかの島とともに、その中央にある。たとえば北へむかって約一・一五リーグのところにあるアムバーレン、イフレセン、フェホルム、キエルドルム、スアルブェン、ブコルムなどと共に。モスコエ島は、ヴェル島の南約一・一五リーグのところにある。両者の間にオテロルム、フリメン、サンドフレセン、ストックホルムといった小さな島がある。ロフォーテンとヴェル島との間の水深は、三六から四〇尋（引用者注・一ひろは約一・八三メートル）である。しかし、もう一方の側、ヴェル島の方の水の深さは、船の航行に支障があるほど水深がない。

海は最もおだやかなときでも、座礁の危険がある。満潮のとき、海流はロフォーテンとモスコエとの海域を荒れ狂ったようなスピードで流れる。しかし、その猛烈な海の干満のうなり声（ごう音）は、最も大きな音をだす、もっとも恐ろしい瀑布にはとうてい及ばない。その音は数リーグはなれた所でも聞こえ、うずまきや穴はそのような広がりと深さをもっているために、もし船がそれに吸い込まれたとしたら、とうぜん海底にまで引きずりこまれる。そして海底で岩にぶち当って粉々になる。

海が和らいだとき、その断片はふたたび浮上する。しかし、のどかな期間は、潮が満ちたり引いたりするときと、おだやかな天候のときだけである。それはほんの十五分ぐらいしか続かず、その激しさはしだいに戻ってくる。海流がもっとも荒れ狂い、嵐によってその激しさが高まったとき、ノルウェーマイルのその海域に近づくことは危険である。ボート、船、ヨットなどは、用心しないと、危険の圏内に入るまえに、その海流に巻き込まれてしまう。またしょっちゅうそういうことが起る。

クジラはその海流に近づきすぎると、その激しさに圧倒されてしまう。クジラはそこから脱出しようとむだな努力をするとき、うなったり、わめいたりするのだが、とうていそれを言葉で表現することはできぬ。あるクマは、かって、島の牧草地にいるヒツジを食いものにしようと、ロフォーテンからモスコエまで泳いで渡ろうとしたことがあった。が、似たような惨状を呈した。クマは潮流に捉えられ、運び去られるとき、海岸で聞えるほどのおそろしいうなり声を発した。

モミや松はその海流に吸い込まれたのち、たくさん再び浮上した。それらは粉々になっており、まるでそこにとげが生えているようでもあった。このことは海底が岩だらけであり、モミや松がその中であちこちで回転したことを如実に示すものであった。その海流は潮の干満に制せられており、六時間ごとにたえず満ち潮と引き潮をくり返している。

一六四五年の四旬節から二週間前の日曜日の早朝のこと――その潮流は、大きなはげしい騒音を発し、荒れくるったために、モスコエ島の家のあらゆる石材はくずれ落ちた。

ポーが「うずまき」の示唆をはじめてうけたのは、ブリタニカのこの記事と、もう一つ『アレクサンダーズ・ウィークリー・メッセンジャー』誌（一八三八・一〇・一〇付）の「私記」から、二、三細かい点の暗示をうけた可能性があるらしい（キリス・キャンベル）。その私記とは、『ザ・マリナーズ・クロニクル』誌（一八三四年）にのっていたアメリカの船長の話であった。それは「海上におけるもっとも異常な惨事の物語」の中に収められた「ザ・メエルストロム」という話であった（四三九～四四一頁）。

――船長はゆっくりとうずまきに近づいて行くと、なんとかその破壊的なうずしおを切り抜けることができた。が、すぐそばにうずまきがあることに気づいた。船はそのうずのきわに入るころ、影響をうけた。船長の話によると、船はうずまきと初めて出会ったとき、ひどく揺れた。が、すぐ常態にもどり、あわ立つ海の中、うずまきの外側のヘリに沿ってつき進んだ。

ポーが描く漁船も進路を変えており、いちどならず、うずまきのヘリのあわの土手に言及している（アーリン・ターナー）。船長がいううずまきの内側の水の色は、〝紺青（こんじょう）〟（ダーク・ブルー）であったという表現は、ポーに反響しているのではないかという。なぜならポーは、「ビンの中から発見された手記」にみられるように、水の色の〝黒さ〟を強調しているからである（アーリン・ターナー）。

また船長の意見によると、もしわが国の大型船十隻ほどが、このうずまきに同時に巻き込まれたとしたら、瞬時にして破壊される運命であったかも知れぬという（『ザ・マリナーズ・クロニクル』、四四一頁）。ポーは「うずまき」において、「もし私どもの船が九十門の大砲を積載している軍艦の十倍もあったとしても、もう破滅の運命がきまっているのだ、といふことがよくわかったのです」（佐々木直次郎訳「メエルストロムの旋渦（かせん）」）と叙している。が、船長がいう foaming, tumbling, rushing to its vortex, very much concave……, the noise too, hissing, roaring, dashing,

THE

MARINER'S CHRONICLE:

CONTAINING

NARRATIVES

OF THE MOST

REMARKABLE DISASTERS AT SEA,

SUCH AS

SHIPWRECKS, STORMS, FIRES AND FAMINES:

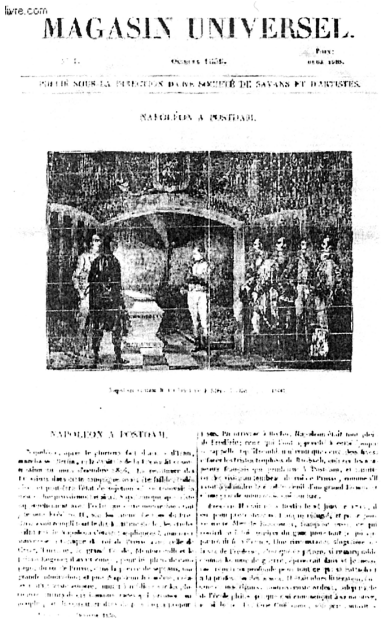
ALSO,

NAVAL ENGAGEMENTS,

PIRATICAL ADVENTURES, INCIDENTS OF DISCOVERY, AND OTHER EXTRAORDINARY AND INTERESTING OCCURRENCES.

NEW HAVEN:
PUBLISHED BY R. M. TREADWAY.
1834.

「ザ・メエルストロム」を収めた『ザ・マリナーズ・クロニクル』誌（1834年）。


MAGASIN UNIVERSEL.

NAPOLÉON A POSTDAM.

「ル・マエルストロム」をのせた『ル・マガジン・ウニヴェルセル』誌の表紙（1810・10）

all pressing on the mind at once, presented the most awful, grand, and solemn sight I ever experienced (The Mariner's Chronicle, p, 441)

《大意》あわ立ち、もまれ、凹みそっくりのうずまきに突進し……さらにシューという音、うなり声、ぶち当る音など、いっさい合っさいがすぐに心に重くのしかかってきた。そして経験したこともない、もっとも恐ろしい、雄大にして荘厳な光景をみせてくれた。

といった叙景文は、ポーのつぎのような表現に反響しているのではないかという（アーリン・ターナー）。

"heaving, boiling, hissing — gyrating in gigantic and immumerable vortices, and all whirling and plunging on to the eastward, … speeding dizzily round and round with a swaying and sweltering motion, and sending forth to the winds an appalling voice, half shriek, half roar."

高まり、湧きたち、ざわめき、——巨大な無数の渦となって旋回し、直下する急湍（急流の意——引用者）の外にはどこにも見られぬやうな速さを似て、渦巻きながら、突進しながら、東の方へ流れてゆく。……

揺らぎながら恐ろしい速さで、眼まぐるしく、ぐるぐる廻り、半ば号叫、半ば咆哮……凄じい声を風に向ってあげてゐるのだ（佐々木直次郎訳「メエルストロムの施渦」）。

しかし、アーリン・ターナーによると、ポーが「うずまき」の話の展開に直接ヒントをえたのは、ブリタニカの記事でなければ、船長の話でもないという。それはうずまきに呑み込まれた船の生存者が語ったものに多くを負っているという。それは意外にもフランスの雑誌にのった記事であった。

『ル・マガザン・ウニベルセル』誌（一八三六・四）に、**「ル・マエルストロム」**と題する作品が、無署名、さし絵入りで掲載された。さし絵は、一隻の船が船体をかたむけながら〝うずまき〟に吸い込まれていく場景を描いている。筆者は幸いこの記事（二二八～二三一頁）に接することができたので、物語の骨子にすこしふれてみよう。この小品には訳者メサジェの丸かっこ注（　）が付いており、それには *Naval and Military*

Magazine（『陸海軍雑誌』）とあることから、この作品が別なフランス誌に発表になったことを示す。が、『陸海軍雑誌』をつきとめることはできなかったという（アーリン・ターナー）。

くだんの「ル・マエルストロム」は、つぎのような話である。主人公は船乗りをなりわいとしていたが、船ごとうずに巻き込まれ、九死に一生をうる。その奇跡的な生還の物語がこの作品である。船名や登場人物は、つぎのようになっている。

船名……ジュンヌ・シュザンヌ号（スコットランドのスクーナー船）

登場人物

船長……キャンブル

副水夫長……Braërigg（どう発音するのか不明）

船客……マックヘッド（イギリスの長老教会の牧師。白髪の老人。娘二人と召使いをともなっている）

娘（長女はヘレナ、妹はスプライトリイ）

召使い（ドナルド――スコットランドのスターリング生まれの老人）

幻視者（予言者）

見習水夫　水夫たち

ジュンヌ・シュザンヌ号は、金曜日にノルウェーの港から出ようとしていた。キリスト教世界では、十三日の金曜日は、キリストが処刑された日であることから、縁起のわるい日とされている。いわゆるブラック・フライデーである。そのため乗組員や幻視者などは、何か不吉なことが起りはしないかと心配した。

しかし、キャンブル船長は、人の心配をよそに秋の日射のなか出帆した。が、やがて危ぐは現実のものとなる。まず雨をともなったスコールがやってくる。海にうねりが出、荒れ模様となる。あらしの到来である。船は帆をたたみ、ゆっくりと進むのだが、風浪によって動揺する。乗組員はやっきとなって船倉に入ってきた水をポンプでくみ出した。そのうちにマストを切り倒すような状況に追い込まれた。

lant. Tout à coup, il lui prit envie de commencer cette lamentation inarticulée, le *ovail*, chant de mort des Ecossais sauvages, hurlement modulé, sanglot qui ne finit pas, soupir prolongé qui ressemble aux soupirs du vent dans les cathédrales. Le vieux domestique écossais leva la tête et reconnut la chanson funèbre du clan des Campbell. Héléna fit un mouvement de surprise; et la petite Sprightly fondit en larmes. L'idée de la mort et de la patrie s'était à la fois éveillée dans leurs esprits.

Quoi qu'il en soit, ces présages ne tardèrent pas à se réaliser. Un grain s'annonça, le vent devint mauvais, la mer houleuse; bientôt ce fut une tempête. La manœuvre s'exécuta lentement, on serra toutes les voiles, mais paresseusement, sans vivacité et comme sans espoir. La superstition, en flétrissant l'avenir, en détruisant l'énergie, anéantit le sentiment de la conservation. Le vaisseau tremblait et frissonnait sous le choc des lames, comme l'homme saisi de la fièvre frissonne dans son lit. Il résistait, grâce à sa construction et à la solidité de sa charpente; mais la route qu'il devait était opposée à celle qu'il aurait dû suivre. Au-dessus de *la Jeune-Suzanne*, autour d'elle, le long des vergues, étincelait l'écume et hurlait la lame qui la poursuivait, en la battant, comme un bélier bat les murailles. La nuit entière se passa à faire jouer les pompes; l'eau entrait dans la cale, et tout ce que l'équipage put faire, ce fut de rejeter cette eau et de mettre le navire en état de voguer. Mais quel navire!

L'un des mâts avait disparu: il fallut couper l'autre.

(Navires enveloppés par le Maelstrom.)

La carcasse ou le cadavre de *la Jeune-Suzanne* continua sa route sur l'abîme qui ballottait en grondant les restes du vaisseau, si leste et si frais, si vigoureux et si non son courage, mais son espoir; les hommes exténués luttaient encore; et le navire, que l'on avait radoubé assez habilement au moyen d'une voile, pour-

「ル・マエストロム」に添えられているさし絵。キャプションに「マエストロムに呑まれる船」とある。

船は刻々と海の深淵（うず）にむかって進んでいる。牧師の一家は祈りをとなえ、船長は景気づけにラム酒をのみ、沈痛な歌を口ずさんでいる。やがて夜が明けるころ、暴風はおさまり、すばらしい天気になった。朝もやが晴れるころ、地平線上に絵に描いたような群島がみえた。波浪はなく、海はおだやかであった。沈黙をやぶって、怪しい物音がかすかに聞えてくる。その音を聞いて二分ほど経ったとき、副水夫長は、船長に、

——もうだめです。マエルストロムです！

といった。この間、水夫らは新しいマストをすえることに忙しく、一時間ほどすると完成した。帆を張ってみたが、運わるく落下した。救命ボートは、嵐によってとっくに流されていた。それみたことか、と沈黙をやぶって予言者がいった。

——ほら、あそこにロホーデンの岩礁がみえる！正夢だった。金曜日、運命の日！いまいましい、船長の奴め！

船上の者は、散りじりになった。祈るもの、踊るもの、酒をくらうものなど。船の甲板は、地獄さながらの舞台と化していた。が、自然そのものは陽光をうけて輝いていた。船はコースを変え、スピードをおとすことなく、大きな口をひらいている深淵へとむかっていた。

やがてうずしおの吸引力を感じるまでになった。ある者は歌をうたいながら、また涙をながしながら、海に身を投じた。自殺者が出たのである。エルセン島の高台には大勢の人びとがあつまっており、この不幸の船をみつめていた。雪のように白い鳥がアンバレン島の高台から船へむかって飛んできて、ながいこと船の跡をつけていた。そのうちに恐ろしい物音がしたかと思ったら、うずしおのうめき、苦悶の声を聞いた。

うずまきの吸引力が強烈であるため、船の進行のスピードも早まってきた。船のそばの波は沸とうし、船は左右にころがり、波のうねりによりゆれうごいた。やがて船は、深淵の中にすべり込み、そこに突進するように落下した。またぐるぐると旋回したかと思ったら、さらに落下するよ

うになった。

召使いのドナルドは、うずまきに身を投じた。長い苦悶の叫びがきこえた。語り手の主人公は、甲板のうえに横たわり、あきらめの境地で現場のさいごを観察した。のちにかれは血まみれになり、裸の状態でヘゲッセン[エ]の岩だらけの海岸に打ちあげられた。元気を回復するや鉱夫の仮小屋まで這っていった。

登場人物の描写は、大ざっぱであり、とぎれとぎれであるが、各人の感情は分析されている。この作品は、ポーの「うずまき」とよく似ているという。いまアーリン・ターナーの説によって、ポーの作品との類似点を要約すると、つぎのようになる。

㈠　両作品は、極度の恐怖体験をかたるところから始まり、その後の心身の影響について語っている。

㈡　きびしい試練を経験したのは、両作品の〝語り手〟だけである。

㈢　ポーの「うずまき」の語り手は、ヘルセゲンの山の頂上から、マエルストロムを指さす。「ル・マエルストロム」では、のろわれた船の乗組員らのようすを目撃したのは、同じ（ヘルセゲンの）山の頂上にいる男女である。

㈣　両者の船は、いっとき凪[なぎ]にあうが、そのときそよ風が吹いたおかげで、うずまきを回避できた。しかし、そのご嵐にあい、マストをうしなう。

㈤　両作品において、近い将来の運命が前もって予見されている。――どうすることもできないこと。あきらめ。いのり。周囲の状況のくわしい観察。――おだやかな海、海にうかぶ残がい、頭上の晴れた空。

㈥　窮地を脱した〝語り手〟は漁夫[ママ]と出会う。

アーリン・ターナーの記述には、誤記がみられる。㈢の「ヘルセゲン山の頂上」（the top of Mount Helseggen — Poe）は、「ル・マエルストロム」の「同じ山の頂上にいる男女」（men and women atop the same mountain — Arlin Turner）とは異なる。「ル・マエストロム」には、「ヘルセンの丘には、男女が群っていた。かれらは助けることができぬまゝ、破滅へと引きずり込まれてゆく不幸な船を見て、同情を禁じ得なかった。」（Sur les hauteurs d'Hellssen, on apercevait des groupes d'homme et de femmes qui voyaient le malheureux navire entraîné vers sa perte et le plaignaient, sans pouvoir le sauver — p.231）とある。

注・mount[マウント]（英）は、小山（hill）または山（mountain）の意である。固有名詞とともに用いられ、Mt.Visuvius ヴェスヴィアス山

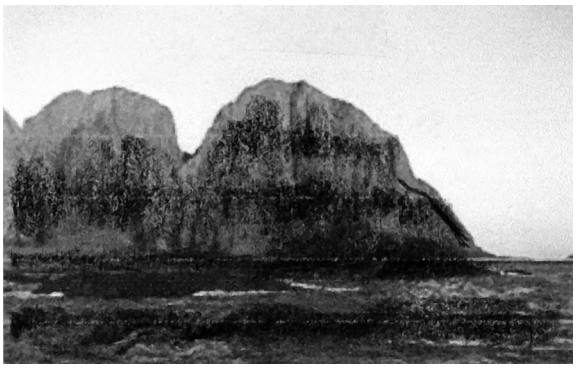
のように書く。mountain（英）は、山、山岳の意であり、ふつう三〇〇メートル以上の山をいうという。hauteur（オトゥール）（仏）は、高台、丘の意である。

(六) ポーの「うずまき」では、語り手の主人公は、仲間の漁船に助けられるのだが、「ル・マエルストロム」では、語り手は磯に打ちあげられたのち、自力で鉱夫の小屋にたどりついたことになっている。語り手は、漁夫ならぬ、鉱夫によって助けられたはずである。「ル・マエルストロム」には、つぎのようにある。

「私はヘゲッセン（ヒ）の磯に血だらけになり、裸体の状態で打ちあげられた。元気を取りもどすと、鉱夫らが住む仮小屋まで這（は）っていった」（je me retrouvai sanglant et nu sur la côte rocheuse d' Heggesen. A peine eus-je la force de me traîner jusqu'à un groupe de huttes habitées par des mineurs. — p.231）。

「ル・マエルストロム」に出てくる島——Hellssen, Heggesen 島の語も統一がとられていない。

ポーの「うずまき」における山場（クライマックス）は、語り手である主人公のうずしおからの脱出行である。



モスケネゼエン島のヘルセゲン。ポーの「うずまき」の舞台の一つ。うずまきから生還した主人公が，知人と崖の上から，うずしおを見るのは，南西の山という。

それはまたこの作品の重要な要素でもあるが、かれはいまのべた三つの材源からヒントをえたものでなく、じぶんの創意工夫によるものらしい。かれはじぶんの独創に信ぴょう性をあたえるために、うずしおにおける円筒形について仮説を表明している。

ポーは、語り手の主人公につぎのような三つの観察をさせている。

(一) いっぱんに物体が大きければ大きいほど、下降のスピードが速いこと。

(二) 球形のものと、そうでない形のものとでは、球形の方が下降のスピードが速いこと。

(三) 円筒形のものと、そうでない形のものとでは、円筒形のものの方が、吸い込まれるスピードがおそいこと。

語り手は、ロフォデンの海岸にまき散らかされた漂流物からこのように推理し、のちに救助されてからは地元の学校教師との対話から、円筒形

の吸引力の特徴を識るに至るのである。主人公は、〝水たる〟にしっかりと体をしばりつけ、船から離れるのであるが、このアイディはポーの独創によるものらしい。

既述の「ル・マエルストロム」は、ロンドンの『フレイザース・マガジン』（一八三四・四）に掲載された**「ザ・マエルストロム――断章」**の改作物（翻案）であると、T・O・マーボット編『エドガー・A・ポー著作集』（一九七八年）中の「うずまき」の脚注にある（五七五頁）。

筆者はフレイザース誌の記事（二六七～二八一頁）に接しえたので、すこしそれについてふれておく。これはどのような作品か、船名や登場人物は、つぎのようになっている。

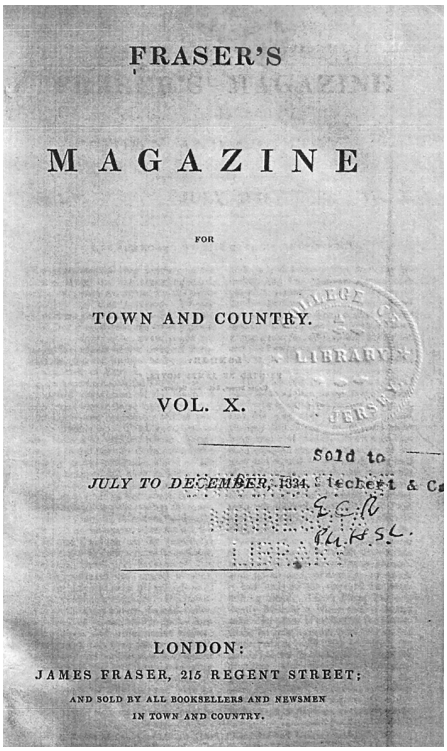
船　名……アイランド・ラッス号

登場人物

船長……マクレアリィ

甲板長……（名前不詳）

航海士……ニコラス・ブレスヤード（中年の体のがっしりとした男）


FRASER'S

MAGAZINE

FOR

TOWN AND COUNTRY.

VOL. X.

JULY TO DECEMBER, 1834.

LONDON:
JAMES FRASER, 215 REGENT STREET;
AND SOLD BY ALL BOOKSELLERS AND NEWSMEN
IN TOWN AND COUNTRY.

『フレイザーズ・マガジン』の表紙（1834・7～12）

船客……マックファレン――老牧師。美人の娘と召使いをともなっている。
娘（長女はエレノア、妹はグレイス）
召使い（ドナルド・ブレイという老人）
幻視者（さすらう若い予言者）
水夫たち　ボーイ

物語は、あわい日が射す秋の昼ごろ、スコットランドのスクーナー船アイラント・ラッス号が、ノルウェーの漁業の町を出帆するところから始まる。その日は、折から魔の金曜日であった。マクレアリィ船長は、乗組員の心配をよそに出帆を命じた。老水夫は金曜日に出帆すると、悪いことが起る、というスカイ島の予言者のことばを船長に伝えたが、船長はそれに耳をかさず無視したのである。船員らは、小声でぶつぶついっていた。

船長にしてみれば、風まちのため港で一週間あしどめを食ったし、順風をえてオークニー諸島（スコットランドの東方に位置）に早くもどる必要があった。船は日射しがよわくなったころ、西へむかっていた。遠くにノールラント地方の岩だらけの山々がみえた。船長はボーイと船室でブランデーをのんでいた。牧師はたいくつをまぎらわすために、召使いに縦笛をふくように命じると、葬儀の悲しい曲とゆかいな曲とを交互にふいた。

やがて風がやみ、なぎにあった。遠くから低いうめき声が聞こえるようになった。そのうちに地平線上に陰うつな雲がたくさんあらわれ、つめたい肌を刺すような風がふいてきた。あらしの到来の前兆である。あらしが近ずくのを見るということは、はらはらする緊張感を味わうことである。あらしは猛威をふるうようになり、それとともに雷やいなずまがひきりなしに起った。船のまわりの海は沸とうし、地獄の様相を呈するようになった。乗組員は船倉に入ってきた水をポンプでくみ出すのに忙しく、やがてマストを切り倒さねばならなかった。

夕方になると、あらしの力はおとろえ、雷雨もやんだ。二日目の朝をむかえるころ、おだやかな日和（ひより）がおとずれた。船は北へむかって漂流しているようであった。朝もやが消えるころ、前方に小さな島がいくつかみえた。そよ風が吹いていたが、それがやみ無風状態になった。するとハチの大群のブンブンというような音が聞えてきた。

応急マストをすえる命令をだしていた航海士は、耳をそばだててその音を聞いた。甲板長もその音をじっと聞いていたが、顔がくもってきた。かれは

――これは大変！

とさけぶと、航海士のほうに歩みより、

――モスコエストロームだ！

といった。牧師の娘らも、乗組員もみな口々に、モスコエストロームのことばをくり返した。

航海士は、マストに使う円材と予備の帆をもってくるようにいうと、一同作業にとりかかった。

新しい帆を張ったが、その重みに耐えかねて落下した。乗組員らは気落ちし、ことばもなかった。いまやうずまきのおそろしいうなり声がはっきり聞えるようになったし、右手にはロフォーデンの岩礁がはっきりと見えた。船首のほうから悪態が聞えてきた。それみたことか、船長のバカ野郎！乗組員らは船尾のほうにむかい船長をつかまえると、その体を海に投じた。船長の唯一の友は、愛犬であった。犬は必死になって主人を助ようとし、上着のエリをつかみ、船のほうに引き寄せようとしたが、海の中に姿を消していった。

つぎに襲われそうになったのは予言者であったが、それを取りなしてまるくおさめたのは、牧師の長女であった。船はゆっくりとうずまきに近づきつつあった。死が避けえないことははっきりしていた。水夫らははじめ固まっていたが、己れの運命を知ると、散りじりとなった。しょげて甲板のうえにしゃがむ者、祈りをとなえる者、貯蔵室から酒をもち出して飲む者、わめいたり、踊り狂う者など、さまざまな光景を呈した。

だれもがろうばいし、意気阻喪しているとき、き然とし男らしくふるまっていたのは、甲板長と航海士だけであった。すばらしい天気であった。空には雲はなく、海をあわい日射しをうけて輝いていた。自然は歓喜につつまれているようであった。身近にモスコエ島がみえ、人を招いているようであった。

船はいまやうずまきの影響を受けるようになり、その運命にむかってつき進んでいた。水夫のうちのある者は、甲板のうえでのたうち回り、またある者はわめき散らしたりしていた。が、絶望のあげく、船外へ身を投げる者もいた。一人が飛び込むと、つづいて二人もあとにつづいた。

船はすべるように進んでいた。マストの切れはしの上にすわっていた航海士は、近くのロフォーデン島の海岸のほうに視線をむけた。エルセゲ

ンの山のふもとの海岸に人が集まっていて、助けることができぬ船の運命をみつめていた。こんなおだやかな日和(ひより)に、船は刻一刻と運命にちかずいていた。もう死は手がとどくところにあった。

水夫らは牧師のまわりにあつまると、熱心に祈っていた。船はスピードをまし、すべるように進むと、怒れる早瀬の中で上下運動をおこし、ぐるぐると回りはじめた。絶望の悲鳴がきこえだした。予言者と何人かの水夫は、まっさかさまにうずの中に吸い込まれていった。航海士も甲板長も波にさらわれ、海中に没し、牧師のうでは、長女の腰をしっかりとつかんでいた。

船は海中に没するとき、船尾を高くもち上げ沈んでいった。助かったのは語り手だけである。意識がもどったときの喜びは大きいが、どうして助ったのかふしぎであった。そのすべをたしかめたかった。

『フレイザース・マガジン』に載ったこの物語は、雑誌記事としては長すぎるし、冗長である。語り手は、登場人物らの性格や心理状態を分析したり、宗教的な会話をそえている点が、この作品の特徴といえる。が、ノルウェーの海岸沖のうずしおに巻き込まれた船の話であることに変りはない。語り手の主人公は、ヘルセゲンの海岸からこの惨劇を目撃している人びとやうずに巻き込まれて行くときのサスペンスについて語っている。が、じぶんでもどうしてこの窮地から脱することができたのかわかっていない。

脱出方法は、ポーの「うずまき」にみられる〝水たる〟と違なり、あいまいにしぼかしてある。つまり何を手段としたものか何も語っていないのである。この点が、フレイザース誌の記事とポーの「うずまき」との異同点である。

『ル・マガザン・ウニヴルセル』に載った「ル・マエストロム」の記事は、このフレイザース誌の「ザ・マエストロム――断章」からの巧みな翻案という説は、まことであろう。話のすじといい、中味といい、両者はよく似ている。つぎに掲げる例文は、ひじょうに極似している一例である。

Upon the shore, beneath the mountain of Helseggen, stood a group of people, watching the doom of the helpless vessel.

（The Maelstrom, p.279）

［訳］ヘルセゲンの山のふもとの海岸に人の群れがあり、助けることができぬ船の運命をみつめていた。

Sur les hauteurs d'Hellssen, on apercevait des groupes d'hommes et de femmes qui voyaient le malheureux navire entraîné vers sa perte et le plaignaient, sans pouvoir le sauver.

（Le Maelstrom, p. 231）

［訳］ヘルセンの丘には、男女が群っていた。かれらは助けることができぬまゝ、破滅へと引きずり込まれてゆく不幸な船をみて、同情を禁じえなかった。

ポーの「うずまき」の材源については以上の通りであるが、つぎに同作品の影響についてふれておく。

ポーが自作の「うずまき」について語った数すくない文章、否、唯一のもの（？）に、つぎのようなものがある。

――（前文略）貴殿は、**メエルストロム**のことをほめそやしておられる。この作品は、あわてて書いたものですから、結末が不完全です。全体から見て、それほどよい作品でないし、「モルグ街の殺人事件」の半分も評判をえませんでした。……

注・J・E・スノッドグラス宛書簡（一八四一・七・一二付、フィラデルフィアより）。この作品は、一八三三年にボルチモアの週刊雑誌『サザン・リテラリー・メッセンジャー』に応募したときの次点作。

ポーはこの物語を組みたてるとき、ばらばらの資料をたくみに使い、一作品にまとめ上げた。が、うずしおのすざまじさに迫真力をそえるため

に、エリック・ポントピダン（一六九八～一七六四、デンマークのルター派神学者）が著わしたデンマーク語からの英訳『**ノルウェーの自然誌**』（*The Natural History of Norway, London*, 1755）から抄録した。いまかれが同書中の記事をどのように使ったかを知るために、両者の類似点を並置してみよう。

『ノルウェーの自然誌』

北緯六八度のノールラント州に、もう一つ潮流があることを伝えた文章。

There is another kind of current, …… in the 68th degree, in the province of Nordland, ……

引きしおのときの潮流のはげしさ、咆哮についての叙述文。

Its violence and roarings exceed those of cataract, being heard to a great distance,

ノールラント州のモスコエ（モスケン）島のちかくで発生する〝うずまき〟（モスコエストロム）とロフォーデン諸島についてのべた文章。

but the roar of its impetuous ebb to the sea is scarce equalled by the loudest and most dreadful cataracts; the noise being heard several leagues off, ……

主人公らが断崖から望見する〝島〟のこと。島々の名称は、『ブリタニカ百科辞典』にも記述がある。

ポーの「うずまき」

「うずまき」を見物しにやって来た主人公らの地理上の位置。

We are now close upon the Norwegian coast — *in the sixty-eighth degree of latitude — in the great province of Nordland* ……

" The mountain of Helſeggen, in Loſoden, lies a league from the iſland Ver, and betwixt theſe two, runs that large and dreadful ſtream called Moſkoeſtrom, from the iſland Moſkoe, which is in the middle of it, together with ſeveral circumjacent iſles, as Ambaaren, half a quarter of a league northward, Ifleſen, Hoeyholm, Kieldholm, Suarven, and Buckholm. Moſkoe lies about half a quarter of a mile ſouth of the iſland of Ver, and betwixt them theſe ſmall iſlands, Otterholm, Flimen, Sandfleſen, Skarholm.

潮の干満のとき、何が起るのか。どんな事件が起ったか、その危険についての記事。これはジョナス・ラムスがかいたもので、『ブリタニカ百科辞典』にもおなじ記事がある。

When the ſtream is moſt boiſterous, and its fury heightened by a ſtorm, it is dangerous to come within a Norway mile of it, boats, ſhips, and yatchs having been carried away, by not guarding againſt it before they were within its reach. It likewiſe happens frequently, that whales come too near the ſtream, and are overpowered by its violence; and then it is impoſſible to deſcribe their howlings and bellowings in their fruitleſs ſtruggles to diſengage themſelves. A bear once attempting to ſwim from Loſoden to Moſkoe, with a deſign of preying upon the ſheep at paſture in the iſland, afforded the like ſpectacle to the people; the ſtream caught him, and bore him down, whilſt he roared terribly, ſo as to be heard on ſhore. Large ſtocks of firs and pine-trees, after being abſorbed by the current, riſe again, broken and torn to ſuch a degree, as if briſtles grew on them. This plainly ſhews the bottom to conſiſt of craggy rocks, among which they are whirled to and fro. This ſtream is regulated by the flux and reflux of the ſea; it being conſtantly high and low water every ſix hours. In the year 1645, early in the morning of Sexageſima-Sunday, it raged with ſuch noiſe and impetuoſity, that on the iſland of Moſkoe, the very ſtones of the houſes fell to the ground."

"The island in the distance," resumed the old man, "is called by the Norwegians Vurrgh. The one midway is Moskoe. That a mile to the northward is Ambaaren. Yonder are Iflesen, Hoeyholm, Kieldholm, Suarven, and Buckholm. Farther off — between Moskoe and Vurrgh — are Otterholm, Flimen, Sandflesen, and Skarholm.

ポーのつぎの記述は、上記の記事とそっくり同じである。

When the stream is most boisterous, and its fury heightened by a storm, it is dangerous to come within a Norway mile of it.[8] Boats, yachts, and ships have been carried away by not guarding against it before they were within its reach. It likewise happens frequently, that whales come too near the stream, and are overpowered by its violence; and then it is impossible to describe their howlings and bellowings in their fruitless struggles to disengage themselves. A bear once, attempting to swim from Lofoden to Moskoe, was caught by the stream and borne down, while he roared terribly, so as to be heard on shore. Large stocks of firs and pine trees, after being absorbed by the current, rise again broken and torn to such a degree as if bristles grew upon them. This plainly shows the bottom to consist of craggy rocks, among which they are whirled to and fro. This stream is regulated by the flux and reflux of the sea — it being constantly high and low water every six hours In the year 1645, early in the morning of Sexagesima Sunday,[9] it raged with such noise and impetuosity that the very stones of the houses on the coast fell to the ground."

（sect.X より）

作家はじぶんの作品のタネをいちいち公表しないのがふつうである。このことは洋の東西をとわず同じであろう。が、ときにたちのわるいあら捜し屋の手によって〝盗作〟だといって、さわぎ立てられる。没後ポーは、『ニッカーボッカー』誌（一八五〇・二）において、『作品集（ワークス）』が刊行されたとき、書評においてたたかれたし、グリズウォールドも同じ年に、イングラム版『ポー作品集』の三巻が出たとき、「回想録」のなかで、ポーの剽窃にふれた。

小さな、かわいい盗作なら、ささいな過失（ペッカディロ）ですまされるかも知れぬが、許容範囲をこえ数ページにわたるばあい、指弾されても文句はいえない。しかし、もっと悪質な例もあるようだ。いわゆる代作である。仄聞したところによると、留学先や国内で、金を使い、第三者に博士論文やレポート、卒論、本をかいてもらい、それに手をくわえ提出したり、じぶんの名で自費出版し、発表することである。金がものをいう時代、金しだいではそれも可能である。

ポーはゴーストライター（代作者）を使わなかったにせよ、その作品が非難にあたるものもあったかも知れぬ。ポーが「うずまき」においてねらったのは、うずまきから生還した男について描くことであった。同時にかれは自然の力の恐ろしさ、その犠牲となる人びとの自衛の闘い、死の苦しみ、未知の恐怖などを描くにあった。かれはその材料を英米仏の諸雑誌のよみ物（海洋冒険談）からえた。

かれは物語に新しい細部をほどこして潤色するために――恐怖の雰囲気づくりやノルウェーの海の現象を描くために――ノルウェーの地誌を利用せざるをえなかった。

このようにポーは、物語の細部に必要な小道具（船やヨット、モミや松の木片）や逸話（クマの話）を叙するとき、また作品に迫真力をくわえるために、じぶんの文章を用いず、他人の語句や説をこっそり使っている。

ポーの「うずまき」の影響。

ポーは亡くなる五年ほどまえ、――パリの日刊紙『ラ・コティディエンヌ』La Quotidienne は、「ウィリアム・ウィルソン」という短篇の翻案

小説を、「ジェームズ・ディクソン　異称　不幸をもたらす類似」James Dixon, ou la funeste ressemblance と題して発表した（一八四四（弘化元年）・一二・三～四、二回連載）。作者は同紙の寄稿者のひとりであり、G・Bとだけ署名がついていた。この作品名だけでは、ポーの「ウィリアム・ウィルソン」の改作物であると気づく者はほとんどいなかったはずである。

謎の人物G・Bこそ、ポーをはじめてヨーロッパに紹介した当人である。二年後、G・Bは「モルグ街殺人事件」の自由訳を『ラ・コティディエンヌ』紙に発表したが、このときもG・Bと署名していた。この作品は、法廷闘争の火ダネとなり、パリで物議をかもすのだが、ポーはニューヨークにおいてそのニュースを知った。G・Bとはいったい誰なのか。その正体をつきとめたのは、フランス人ならぬアメリカ人であった。

ウィスコンシン大学のフランス文学の教授ウィリアム・T・バンディは、八年間『ラ・コティディエンヌ』紙の分厚いファイルに目を通しつづけていた。二、三冊おえたとき、『モンテーニューの随想録』の欄外に書かれた注（ボルドーの公立図書館で発見されたもの）に関する記事に注意をひかれた。バンディは、このような記事は、モンテーニュ学者ならだれでも知っていると思った。パヤン博士のコレクションのカタログを調べたところ、その中に、G・Bじしんのフルネームで書かれた記事を発見した。

G・Bとは、ボルドー生まれのジャーナリスト――ギュスターブ・ブリュネ Gustave Brunet であることが判明した。

このようにポーは諸外国のうちでも、まずフランスにおいて知られた。フランスにおけるポーの作品の伝播（でんぱ）について研究しようとするとき、翻訳史について究める必要がある、といったのは、レオン・ルモニエであった。一八四五年ごろ、フランスと英語圏の国々との橋わたしをなす文学者の集団がいたが、かれらは『イギリス評論（ルヴュ・ブリタニック）』の寄稿者であった。同誌は一八四六年九月、ポーの「うずまき」Une descente au Maëlstrom を発表したが、この作品はポーの名声をフランスに広めるのに貢献したという（レオン・ルモニエ）。

訳者はエミール・ドラン・フォルグ（一八一三～八三）というかなり名の知られた人物であり、オールド・ニックのペンネームで発表した。かれの訳業は完全なものではなく、欠陥もあった。原文にない文章を書き足したり、文飾したことである。しかし、フォルグ訳を大観すると、ポーの文体を移していないにしても、その物語の正確なすがたを提出したという。

フォルグ訳につづいて、「うずまき」を掲載したのは政治的な日刊紙『ラ・デモクラスィ・パスィフィック』である。一八四七年九月二十四、二十五日のことであった。訳者はイギリスのブライトン生まれのイザベラ＝メアリー・ハック（?～一八九四）である。二十歳のとき、学者でフ

ーリエ主義者のヴィクトール・ムーニエと結婚した。彼女の訳業もあながち欠点がないわけではなかった。彼女の欠陥は、省略が多かったことである。ポーの文体を簡略化したことであった。

ムーニエ訳につづいたのは、ボードレールである。かれは『ル・ペイイ』紙に、「うずまき」を三回にわたって連載した（一八五五・二・五、六、七）。のちかれはミシェル・レヴィ・フレール社からポーの訳書『異常な物語』（一八五六年）を出すとき、「うずまき」を収録した。

モーパッサンの短篇に「けいれん」（Le Tic）という作品がある（一八八四・七・一四、ジルブラス）。娘が亡くなったので埋葬すると、娘から指環をぬすもうとした墓荒しがいた（じつは召使いが犯人）。娘は指を切られる痛みで生き返る。死の世界から帰ってきた娘をみて、ショックのあまり、召使いは卒倒して死に、父親は亡霊を手で払いのけようとして〝けいれん〟をおこし、それが一生つづいたという話。

父と娘は、のちにフランス中部のオーヴェルニュ地方の温泉場に出かけ、そこで湯治するのであるが、物語の語り手は、この二人をみて、ポーの小説に出てくる人物の印象をうける。父親は若々しい顔つきをしているが、髪がまっ白なのである。

ポーの「うずまき」に出てくる、うずしお見物の案内人は、恐怖体験から真黒だった髪が、一日もたたぬうちにまっ白になり、体からふるえが去らなくなる。モーパッサンは、ボードレールの仏訳でポーの作品をよんでいたようである。かれは極度の恐怖のあまり、一瞬にして黒髪が白髪に変わるアイディアをポーから借用したものと考えられる。こんなところにも、「うずまき」の影響が現われているといえる。

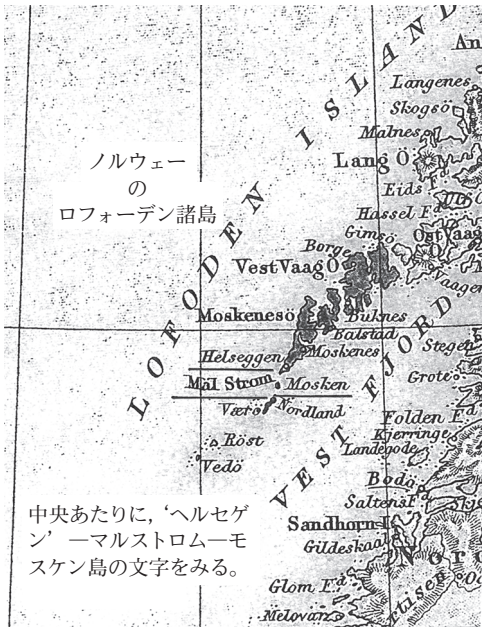
三　「うずまき」とはどんな物語か。その大筋

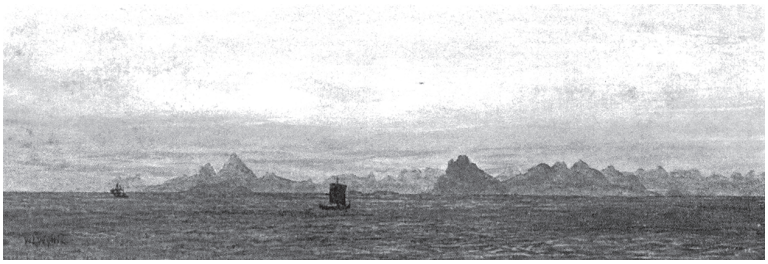
舞台は、北緯六十八度――ノルウェーのノールラント州（ド）にある――ロフォーデン地方のヘルセゲンというけわしくそびえ立つ岩の頂上である。そこに三年ほど前に〝うずまき〟に巻き込まれ、六時間の死ぬような恐ろしい体験をした男が、知人を案内する。案内人は、みかけは老人だが、齢はそんなにいっていない。恐怖体験から真黒だった髪が、真白になり、おまけに体からふるえが去らないでいる。

二人は地上から四、五百メートルもあろうかと思われる、黒く光った岩の絶壁のうえで、腹ばいになる。その頂上から広々とした大洋がみえる。その水の色といったら、インキのように黒い。左右をみると、恐ろしいほどの黒い絶壁がつらなっている。そこに波がぶつかり、白いしぶきを高くあげている。八キロほど前方に、荒涼とした小島がみえる。また二本マストの帆船のすがたもある。

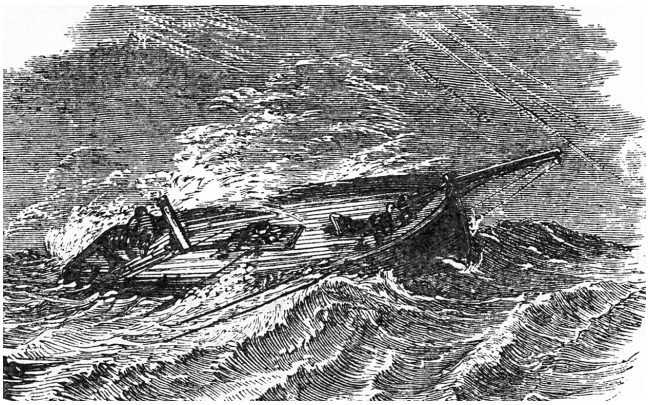
案内人はいった。あの遠い方の島は、ヴァルウ島。まん中の島はモスケエ。さらにそこから北に一・六キロほどの所にあるのは、アンバアレン。もっと遠くの――モスケエとヴァルウとの間にあるのは、オッテルホルム、フリィメン、サンドフレエゼン、ストックホルムである、と。

ヘルセゲンの頂上に、十分ほどいると、アメリカの大草原にいる野牛がほえたてるような声が聞こえてきた。また目のまえの波が、東のほうに流れる潮流に変わろうとしていることを知った。その潮流はだんだんスピードをまし、ヴァロイ島までの海をはげしく荒れ狂わすようになった。ヴァロイ島とモスケン島との間の海は、――湧きたち、ざわめき、巨大な無数のうずとなってぐるぐると回った。が、しばらくすると、うずまき





ロフォーデン諸島の風景
M. A. Wyllie 著 *Norway and its Fjords* より。Methuen&Co. 刊行年不詳。



‘うずまき’に呑まれようとする漁船の図

眼下に‘うずまき’をみる語り手と知人。*Poe's Tales*, Ward, Lock & Tyler, London, 1878 より。

は一つずつ姿をけしていった。

しかし、いったんおさまったうずまきは、ふたたび活動をはじめ、直径が八〇〇メートルもあろうかと思われるほどの円をなした。うずまきの縁は、幅の広いしぶきの帯をなし、色は白である。漏斗の内側は真黒な水の壁である。それは水平線にたいして四十五度ほどの角度で傾斜し、すざましい声をあげてぐるぐる回っていた。山はふもとからふるえ、岩はゆれた。案内人は、これこそあのメエルストロムの大うずであり、われわれノルウェー人は、モスコエ・ストロムと呼んでいるといった。

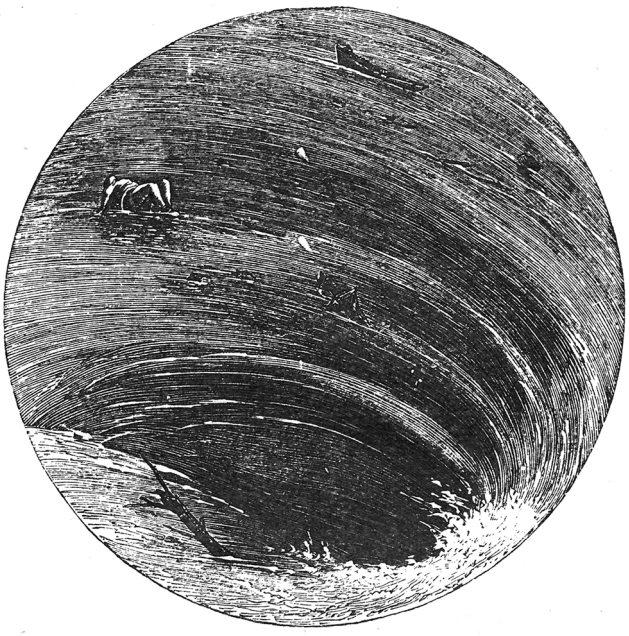
かって一頭のクマは、ロフォデンよりモスケンまで泳いで渡ろうとし、潮流にまき込まれた。そのものすごい咆哮は、遠くの岸まで聞こえた。またこのうずに呑まれたモミや松の幹をみると、それらは折れくだけ、その上に剛毛が生えたようになっていた。うずまきはどのようにして起るのか。一般論からいえば、干満のとき、上下する波が岩石や暗礁の背にはげしくぶち当って生じるものであり、海水はそれらの岩石によってせきとめられ、滝のように落下する、と老人は語った。

うずまきを見た知人は、風のあたらぬ所へ案内されると、老人から話のつづきを聞いた。語り手と二人の兄弟は七〇トンのスクナー帆式の漁船をもっていた。その船にのり、いつもモスケンのむこう――ヴァロイ島に近い島々の間で魚をとっていた。岩の間の択りぬきの場所は、危険ではあったが漁獲高があり、高級魚がたくさんとれた。天気のよいとき、十五分潮がよどむと、モスコエ・ストロムを横切り、オッテルホルムやサンドフレエゼンのあたりで錨を投じて漁をした。

その漁場は、天気のよいときでもいやなところであった。一八……年七月十日――語り手の船は、

午後二時から例の島のほうにいって漁をした。船がいっぱいになるくらい魚がとれた。錨をあげ帰路についたのは午後七時ごろ。八時ごろ、潮がよどむが、このとき難所を通り抜ける必要がある。船は右舷後方に風をうけ、快走力で進んだ。が、ヘルセゲンから吹いてくる軟風のために、逆帆になってしまった。これではうずまきを乗り切って進めないので、もとの碇泊所へもどることを考えたが、そのとき水平線上に、ふしぎな赤かっ色の雲がわき上っていることに気づいた。

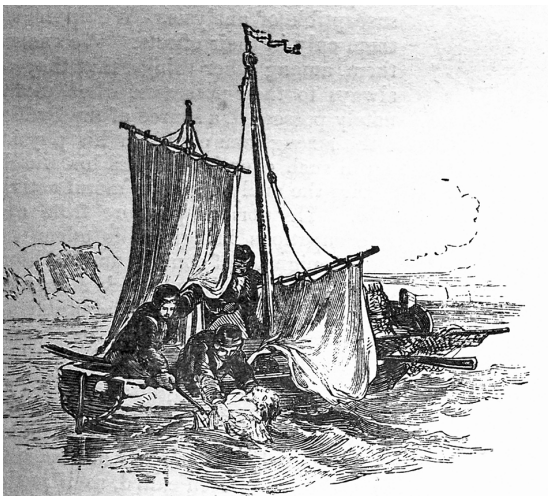
そのうちに南風がやみ、一瞬なぎになり、船はただようようになった。一分もたたぬうちに大暴風がおそってきて、二本のマストを吹きとばした。そのとき弟は、風といっしょにさらわれた。あたりはまっ暗であり、人の顔もみえぬほどであった。しばらく船は水に浸ったような感じであったが、この間語り手は前檣（ぜんしょう）の根もと近くにある輪付きボルトをしっかりとつかんでいた。波にさらわれたと思った兄が生きていて、語り手の耳もとに口をよせると、ひとこと「モスコエ・ストロムだ！」とさけんだ。



‘うずまき’の図

それを聞くと、語り手の体はがたがたふるえだした。船はうずまきにむかってまっしぐらに進んでいた。やがて風のために押えつけられていた波は、山のようにもり上ってきた。それまであたり一面、まっ暗であった世界にも変化がみられるようになった。空をみると、円い雲の切れ目ができていて、晴れた空がすがたをみせた。それは濃い鮮明な青であった。また満月が現われ、輝きだしたので、あたりのようすがよくわかった。

語り手は、月明りによって時計の文字盤をみたが、時計は七時で止まっていた。〝潮だるみ〟の時刻におくれていることがわかり、がく然とし色をうしなった。モスコエ・ストロムのうずまきは、約四〇〇メーター先にある。ほどなく波がしずまったかと思ったら、船は一面あわに包まれた。船は左舷に半分まわると、新たな方向にいなずまのように進んだ。と同時に、水のうなり声は、蒸気ガマの放水管から出たような物音にかき消された。



語り手が救助される図

船はうずまきの周りの白い波の帯（ベルト）のなかにいた。船はうねる波の気泡のようなものの上をすべるように進んでいた。いよいようずまきの口部に呑まれかかると、語り手はそれに近づいているときよりも、かえって気がおちついた。うずまきそのものに対してするどい好奇心が起ってきた。生命をとしてまで、その底をさぐってみたいと思った。そんな気持になった一因は、風がやんだことであった。

打ち寄せる波の帯（ベルト）は、海面よりずっと低く、高く黒い山の背となってそびえていた。船はその波の帯のうえを一時間ちかく飛ぶようにぐるぐると回り、内側の縁へとだんだん近づいていった。その間、語り手は輪付きボルトをしっかりとにぎっていた。兄は船尾のほうにいて、そこの突出部にしっかりと結びつけてあった、空（から）の水たるにつかまっていた。船が深淵の縁に近づいたとき、兄はその水たるから手をはなし、弟の輪付きボルトのほうにやってきて、それをつかもうとしたので、こんどは語り手の弟のほうが、船尾のタルのほうにいった。

船は右舷にぐっと傾いたかと思ったら、深淵めがけて、まっしぐらに進んだ。満月の光によってみると、漏斗の内側は、黒たんのようであった。船が運ばれてゆく流れる黒たんを見わたすと、船、建築用材、樹木の幹、家具、タルの破片などがみられた。やがて主人公は、円筒形のものは、うずまきの吸引力につよく抵抗する話を思いだし、兄をその運命にまかせ、水たるに体をしっかりとしばると、ためらわず、海中に飛び込んだ。

船は一時間ほど経つと、下の湧き立つあわの中にまっさかさまに沈んでいった。語り手のタルは、うずまきの底と、船から飛びこんだところの中間あたりに沈んだとき、うずまきに変化がみられるようになった。うずの回転が弱まってきたのである。〝潮だるみ〟の時が近づき、うずまきの底がゆっくりと高まってくるような気がした。

語り手はロフォーデンの海岸がよくみえる――モスコエ・ストロムのうずまきが、さっきまであった、山のような高波の表面に浮びあがった。が、さいわい一隻の漁船によって救われた。

四　文体からみた「うずまき」の構造と特徴

ポーの英語の構造を「うずまき」を例として取りあげてみたい。ポーの物語は、概してきわもの師がつくったような印象をうける。「うずまき」を大観すると、いかにも読者うけするように、大げさにしかけ、大げさに描いたように思える。つまり誇張法を採っていることである。「うずまき」の冒頭の一節――すなわち、要旨説明文（トピック・センテンス）は、読者の関心をあおり、かれらを作中に閉じ込めるための重要な役割をはたしている。それはまたこれから話がどう展開していくかのカギをもにぎっている。

語り手の「話」が主軸となって、うずしおのごとく、さいごまでぐるぐる展開する。ポーの文章は、モーパッサンのそれのような、彫りのあさい、みじかいものと異なり、比較的いきの長い、長文である。ものごとを直接的に、また簡明にのべるときは、単文（主語と述語の一組から成るもの）が適しているが、内容がややこみ入り、単純でないものは、重文や複文（主語と述語をもつ部分が、二つ以上ふくむ文章）で表現するのがよいとされている。

文章の種類からみたばあい、「うずまき」は口語体の叙事文（事件をありのままに述べ、つづったもの）である。ポーはうずまきに呑まれるといった異常な事件の原因、展開、進行を、時間的推移のもとに、劇的に、読者をしてじっさいその場にいるかのように、再現しようとした。かれはそのときの状況――雰囲気、緊張感をつくりだすために、視覚的、聴覚的、色彩的手法を用いている。かれが用いる修辞上の技法は、つぎのようなものである。

一　擬人法（パーソニフィケイション）（物や人間でないものを、人間のようにみる法）。「うずまき」にはこの例はない。

一　声喩*法（オノマトロジー）（自然現象の音をまねて用いる法。音声―動作―状態を模写したもの）

一　直喩法（スィミリ）（「……のような」といった語を使って表現する法）

一　誇張表現（ちょうゆ）（漸層法（クライマックス）、斜体字（イタリック）、ダッシュなどの多用）

一　色彩語（断崖、空、海の色彩的描写）

*喩はたとえる意。

ポーは文体上の効果をあげ、読者を作中に投げこむために、要旨説明文を物語の冒頭にもってくる。うずしおに吸い込まれるといった事件によくかなうように、かれは単一の効果をつくり出すことに努める。そのためには書きだしの文章が肝心である。最初の文章がまずいと、第一歩で失敗したことになる。これはかれがよくつかう手法――常とう手段でもある。

"Not long ago," said he at length, **and**$_1$ I could have guided you on this route **as well as** the youngest of my sons; **but**$_2$, about three years past, there happened to me an event **such as** never happened before to mortal man — **or**$_3$ at least such as no man ever survived to tell of — **and**$_4$ the six hours of deadly terror which I then endured have broken me up body and soul.

これが昔なら私はあなたと同じやうに一等すえっこの奴でも、ここへ引っぱって来れたでせうが、三年ばかり前に、今まで人間の経験したこともないやうな出来事に遭遇(でくわ)して――とにかく活(い)きのこってその話をする者はとてもないやうな出来事にあって――いやもウそのときの大した恐ろしさと云ったら、たった六時間の間(うち)に身体(からだ)と心もすっかり壊(こわ)されて了(しま)ひましたのぢゃ。

岡田実磨訳「渦巻」より。

訳文ちゅうに一箇所あやまりがある。「私はあなたと同じやうに……でせうが」は、「私はすえの息子と同じようにあなたを容易に案内できた」の意である。が、訳者は案内された人間（＝あなた）とおなじように案内できたのにと訳している。as well as は、as easily as の意である、と豊田　実の注釈本 Prose Tales by E. A. Poe（研究社、昭和3・2、第三版）の二三七頁にある。

英語を母語とする英米人は、この一節をよんで、どのような印象をもつだろうか。語学的に細かく分析できないにしても、原意を味わうことができるはずである。作者は、主人公に六時間の〝恐怖体験〟を語らせる糸口をあたえるために、文尾まで文章を引きのばしている。擬(ぎ) loose sentence（散列文）とか擬 periodic sentence（掉尾(とうび)文――多くの節をふくみ、文尾において文意が完成する）とでもいえそうである。

この一節に、等位接続詞（and, but, or など）が四度出てくる。文頭の and はいかなる意味で用いられているのか。この and は前の句を対等につないでいない。だから「そして」の意ではない。*Not long ago*「そんなに古い話ではない」という句の中味を補足するために、and という接続詞を用い、I could have guided……以下の文章を導いている。この and は、直訳すると、「つまり」とか「すなわち」となろう。but_2 は前の節に対して反対の意味をあらわす節をみちびき、「しかし」とか「とはいえ」の意である。or_3 は同格的な前文をむすびつけ、「つまり」「言いかえると」の意であろう。and_4 は以下の文章を強調し、独立した文章をみちびき、「しかも」「それも」の意である。

Not long ago の副詞句は、さいごの文章までかかり（関係し）、間のびし、見方によっては、この文節ぜんたいをしまりのないものにしている。また文中に *such as* といった相関詞が二度ばかり出てくる。が、これは同じ語をあえてくり返し使うことによって、文体的効果をねらったものであろう。such は形容詞、as は関係代名詞であり、as 以下の形容詞節をみちびいている。意味は、「たとえば」とか「すなわち」である。

ポーの文体を解剖するにあたって、誇張表現からみてみよう。これは大げさな言い回しをいい、たとえば、つぎのようなものがある。語り手と知人がいる絶壁は、地上 some 15 or 16 hundred feet（およそ千五、六〇〇フィート――約四五〇メートル）とある。両人が耳にするうずまきの音は、*the moaning of a vast herd of buffaloes upon an American prairie*（アメリカの大草原にいる野牛の大群のうなり声）。目撃したうずまきの大きさは、なんと *more than half a mile in diameter*（直径が半マイル［約八〇〇メーター］以上もある円）。その大うずのすざましい声は、山をすそからふるわせ、*and the rock rocked*（岩をもゆれうごかした）。

声喩(オノマトロジー)法の例としては、つぎのようなものがある。

つぎに直喩法の例をみてみよう。

At the same moment the roaring noise of the water was completely drowned in a kind of *shrill-shriek* — such a sound as you might imagine ……

注・イタリック体は、引用者による。
それと一緒に、吠えるやうな水の音が一種甲走った叫聲で打ち消された……

shrill-shriek は、甲高い、悲鳴の意。ここでは類似の音韻をくり返している。*sh*……, *sh*……と頭に韻をふませている。

the surf which reared high up against it its white and ghostly crest, *howling* and *shrieking* for ever.

注・イタリック体は、引用者による。
その大濤の白く悽い潮頭は永久に絶叫怒號してゐる。

注・岡田実磨訳「渦巻」より。
以下の引用訳もおなじ。

What seamen term the *chopping* character of the ocean beneath us ……

今迄は水夫達の「波立つ海」と云ふ状態であった。
眼の下の海が……

注・*chopping* は「三角波の立つ」意。chopping sea は「逆浪」。

It took less than a single day to change these hairs from a *jetty black to white*,

私はたゞの一日もかゝらんで
真黒な髪を真白にされ……

horridly black and

恐ろしく黒い、……

precipice of *black shining* rock

黒光した巌の……

its *white and ghastly* crest

その大濤の白く悽い潮頭は
……

Whose waters wore so *inky a hue* as to ……

太洋の水はインキのやうに真
黒である。

jet-black wall of waters

真黒な水の壁

誇張表現のうち、ポーはこの物語において、斜字体（イタリック）――ダッシュなどをさかんに使用し、また up や round の副詞が、動詞と密接に結合した〝動詞副詞結合〟において副詞をくり返し用い、文体的効果をねらっている。

Around in every direction it was still *as black as pitch*, but……

那方（どつち）を見てもまだ真闇（まつくら）でしたのが、……

Presently he shook his head, looking *as pale as death*, and……

とすぐ兄（あに）は死人（しびと）のやうな、蒼（あお）白（しろ）い顔をして、頭を振つて……

My hair which had been *raven-black* the day before, was *as white as* you see it now.

昨日（きのふ）まで烏（からす）のやうに真黒だつた髪毛（かみ）がこの通り真白（まつしろ）になつて居（を）つたのですものな。

,and bore us with it as it rose *-up-up-* as if into the sky.

殆（まる）で天（そら）へ届くくらい、上へ〳〵と波（なみ）を連（つ）れて船を押（お）し上（あ）げる、……

How often we made the circuit of the belt it is impossible to say. We careered *round* and *round* for perhaps an hour.

何遍その帯をぐる〳〵廻りしてゐましたらうか、若（も）しかすると一時間も走り廻ってゐたかも知れません。

ポーは表現効果を高めるために、いろいろ工夫している。音のほか、光や闇――風物（崖、空、雲、海）を描くとき、色彩をかなり意識し、それを意図的に使用している。が、話を誇張し、おもしろくするためであった。それはまたポーの演出法でもあった。「うずまき」に出てくる色彩はどのようなものか。かれが象徴として使った色彩の例を、物語の中からひろうとつぎのようになる。

暖色（だんしょく）（ふつう赤、黄、かっ色など、暖かい感じを与える色をいう）。作中には暖色はすくなく、わずかにつぎの二例があるのみである。

copper-colored cloud　（赤褐色）

the rainbow disappeared　（虹［にじ］）

寒色（かんしょく）（青、白、黒、灰色、鉛色など、寒い感じをあたえる色）

岩崖	*black* shining rock	（黒びかりする岩）
〃	*dark* rocks	（黒っぽい岩）
海	*jet-black* wall of water	（まっ黒な水の壁）
空模様	it became suddenly so *dark* that we could not see each other	（突然、暗やみになり……）
〃	*as black as pitch*	（まっ暗らな）《直喩表現》
海	*deep bright blue*	（濃い鮮明な青）
〃	*as pale as death*	（まっ青）《直喩表現》
〃	*the black* walls	（黒い壁）
〃	*ebony*	（黒たん）
容姿	*raven-black*	（カラスのように黒い、漆黒）《直喩表現》
〃	*as white as* you see it	（ごらんの通りまっ白）《直喩表現》

「うずまき」において、ポーは「黒」を好んで用いた。黒色は古今東西をとわず、恐怖―不吉―絶望―死などの象徴である。それが海の色、こ

とにうずまきの色の形容に用いられると、いっそう不気味さがまし、読者の恐怖をあおる。おなじ黒でも――うるしのような黒――カラスのような黒――など、いろいろある。が、「うずしお」の主人公の髪の色は、「カラスのぬればいろ」であった。

五　明治・大正・昭和期の「うずまき」の翻訳小史

わが国において、はじめて「うずまき」を訳したのはだれであったのか。それは森鷗外であった。明治もすえの――明治四十三年（一九一〇）八月、『文芸倶楽部』（第16巻第11号）は、さし絵を二枚そえて「うづしほ」を掲載した。

うづしほ　（古洞画）
エドガア・アルラン・ポオ作
鷗外口訳

がそれである。鷗外訳は、直接ポーの原文から訳したものでなく、独訳からの重訳であったところに大きな特徴がある。

かれが「うずまき」を訳すとき用いた底本は、ヘッダとアルトゥール・メーラー＝ブルック共編の『ポー作品集』（Hedda und Arthur Moeller-Bruck: *E. A. Poe Werk*, Minden I. W. J. C. C. Bruns' Verlag, 1904）であった。これはイギリスのイングラム版『ポー作品集』四巻をもとに独訳したもので、十巻本としている。「うずまき」が収録されているのは七巻である。

鷗外はドイツから帰国後、この独訳を丸善の古書のカタログをみて取りよせたものであろう。かれは生前ポーの短篇を三つドイツ語訳から訳している。

「うづしほ」（独訳のタイトル *Im Strudel des Malströms*, 原題 A Descent into the Maelström, 1841）
「十三時」（独訳のタイトル *Der Teufel in Glockenstuhl*, 原題 The Devil in the Belfry, 1839）
「病院横町の殺人犯」（独訳のタイトル *Der Mord in der Spitalgasse*, 原題 The Murders in the Rue Morgue, 1841）

「うづしほ」は依頼原稿であったものか、『文芸倶楽部』にのる二ヵ月ほどまえに翻訳をおえている。「鈴木本次郎筆受に来ぬ。渦潮の訳成りぬ」（明治43・6・23付の日記より）。

鷗外訳を原文とつきくらべて検討してみると、よい点やわるい点が、いろいろ目につく。大観すると、かれは逐語訳していない。一言半句の厳密なせんさくにこだわっていない。のびのびと自由に訳している。原文にないようなことばを加えたり、動詞を訳さなかったり、名詞の意味をとりちがえたり、ときにポーが顔まけするような大胆な訳をやってのける。

たとえば《fünfzehn — oder sechzehnhundert》は「一五〇〇ないしは一六〇〇（フィート）」の意であるが、鷗外はこれを「一万五千呎乃至一万六千呎（呎はフィートの意）」と訳した。かれはなぜこのように基数詞をよみちがえたのか。それとも読者を意識して、わざと誇大的に訳したかのいずれかであろう。訳文と原文とをつき比べながら読むとき、すぐ気づくことは、鷗外訳は字句にこだわった逐字訳でなく、どちらかといえば自由訳だということである。

鷗外の翻訳の欠点については、いろいろいわれ、また書かれもしたが、本人はいっこうに痛痒（いたみ、かゆみ）を感じなかったし、むしろ開き直っている。小説や脚本は、博言学（言語学）的な研究とはちがう、という。一字〳〵訳して（逐語訳して）、それですべておわるものではない。加筆した語を原文にないといって非難したり、原文にある語を省略したといって責められても、こっちはいたくもかゆくもない（「翻訳に就いて」の意訳）という。じつに見あげた勇気である。

文芸倶楽部
うづしほ（古洞書）
エドガア・アラン・ポオ作
鷗外口譯

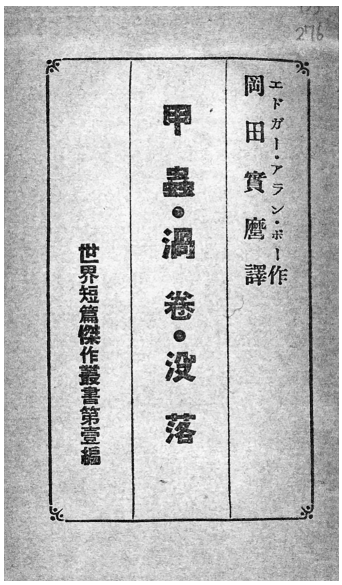
本邦初の「うずまき」の翻訳。鷗外がドイツ訳から訳したもの。

鷗外の「うづしほ」が、「うずまき」の翻訳第一号とすれば、第二号は、

原語（英語）から訳した、

エドガー・アラン・ポー作　渦巻
岡田実麿訳

である。これは北文館の世界短篇傑作叢書の第一編として刊行された『甲虫・渦巻・没落』（大正2・5）ちゅうの一篇である。訳者の岡田実麿（一



ポーの「うずまき」をおさめた『かぶと虫』（大正２）

八七八〜？）は、当時一高の英語教授であった。明治四十一年に一高に奉職し、大正十二年に退職した（『第一高等学校一覧』）。岡田は広島県甲奴郡上下町の金穀貸附業の家に生まれ、長じて同志社、慶応義塾、アメリカのオベリン大学にまなび、学士号を取得し（一九〇二・六）帰国した。

その後、神戸高商教授をへて一高教授となり（明治40・9）、のち依願退職し、明大予科の教授となった（大正13・4）。名前からして公家のようであるが、平民であった。名は体を表すように、本人は美せんをたくわえ、色白の麿然とした美男子であった。細君はアメリカ人（？）、さすが本場アメリカで教育をうけただけあって発音はよく、訳も堂々としていた。が、皮肉屋であり、意地のわるさは一高随一であり、あまり人望はなかったようだ（「何れも偉い先生ばかり」『向陵生活』所収、大正４）。

訳者によると、「渦巻」はその科学的想像の巧緻（きめこまかく上手にできている）をきわめ、現実的効果において、その奇怪なる空想を現実のごとく戦慄させる、という（「序言」）。要するに「渦巻」は、ポーの擬科学的な物語の一典型であり、訳出にあたり、原作の構文、精神を忠実に移そうとしたが、ごつごつした訳文になったという。しかし、原典の妙趣（すぐれたおもむき）だけは写しえたと自負している。

岡田訳は、口語体で訳されていて、けっして読みずらい文章ではないが、こんにちから見れば、古風な漢語がたくさん用いられていて、多少抵抗が感じられるかも知れない。岡田訳は語学的に正確のようだが、固有名詞（島）のよみ方にだいぶ訂正を要するものがあるようだ。たとえば、つぎの語（ノルウェー語？）は、どう発音し、どのように表記すべきか。

Vurrgh（ヴァー）——▶ベール島（じま）
Hoeyholm（ホエイホルム）——▶ホットホルム
Kieldholm（キールドホルム）——▶カイルドヘルム
Moskoe（モスコエ）——▶モスケ島（じま）
Otterholm（オテルホルム）——▶オッターホルム
Skarholm（スカルホルム）——▶ストックホルム

注・岡田のカタカナ表記。

いずれにせよ、岡田訳「渦巻」は、あるいみで原文から訳した第一号ともいえる。

大正時代にはもう一つ、「うずまき」の翻訳がある。

鳴門（なると）の底（そこ）
乗っている漁船と共に大渦の底に吸いこまれる話

と、あるものがそれである。

これは博文館の探偵傑作叢書の第29篇として刊行された

アラン・ポオ著
吉田両耳訳
怪奇探偵　黄金蟲

ちゅうの一篇である（大正14・1）。

吉田両耳訳『怪奇小説　黄金虫』の表紙

吉田訳は全文総ルビつきであり、つぎのように訳されている。

吾々は、その時一番高い岩の頂上に達した。彼は終にかう云づた。
『今少し前だつたら、私の一番年若い悴にも劣らない元氣で、此處へ御案内が出來たのですが、三年ばかり後に、まだ人間の出遇つたことの無いやうな目に遇つたので――まあ少くとも生き戻つて其物語をしたものゝ無いやうな目に遇つて、その折の六時間の恐ろしさに、體も元氣も、すつかり挫けてしまつたのです。貴君は私を餘程の年寄と思召すかも知れませんが、さうではございません。一日も經たない中に烏の羽のやうに黒かつた髪が眞白になり、手足が弱り、神經がたるんでしまつたのですそのため少し骨の折れる事をやつても、慄へたり、物の影を見てもびつくりするやうな譯で、これつばかしの岩から見下ろすのにも、眩暈がするくらゐになりました。』

文中の「……に劣らない元気」だけは、やゝ難点があり、これは既述のように、「やす〳〵」と訳すべき箇所であろう。「うずまき」の原題を思いきって〝鳴門の底〟と訳したのは斬新であり、読者の意表をつく。

谷崎精二（一八九〇～一九七一、大正・昭和期の小説家・英文学者。谷崎潤一郎の弟。大正二年、早大文学部英文学科卒。早大教授。『ポオ小説全集』の訳業がある）が、ポーの短篇を訳して上梓したのは大正二年の七月だったという。ポーの作品（詩、短篇）は早くからわが国に紹介されていたが、貧弱ながらかれの作品をまとめて出版した訳者として、もっとも早い者の一人であったという。

その後、谷崎は、Funk & Wagnalls 社刊の *The Works of E. A. Poe*（一九〇四）十巻本によって、ポーの作品をあらかた訳すのであるが、ときに既刊の訳書を買いもとめて読んでみることがあった。「中にはかなり無責任な翻訳」もあったという。しかし、かれが見た範囲では「吉田両耳氏の訳本がほとんど唯一正確で、忠実で、よい参考になった」といっている（「解説　ポオに就いて」『ポオ傑作集』所収、大泉書店、昭和22・10）。

吉田訳では、ポーがいう Maelström は、すべて「鳴門の大渦」となっている。

"This," said I at length, to the old man — "this *can* be nothing else than the great whirlpool of the Maelström."

"So it is sometimes termed," said he. "We Norwegians call it the Moskoe-ström, from the island of Moskoe in the midway."

私は終ひに老人にかう云つた。
『これが……これがあの有名な鳴門の大渦なんだね。』
『時にはさう云ふ人もあります。我々諸威人は、眞中にあるモスコウ島の名を取つて、モスコウの潮と云つてゐます。』

吉田訳は、谷崎がいうように、おおむね正確に訳されているようだ。吉田両耳訳『怪奇探偵黄金蟲』はよく売れ、昭和二年七月五版を刊行した。

注・訳者の吉田良次（一八八三〜一九六八、両耳はペンネーム）は、秋田県平鹿郡平鹿町のひと。東京帝大の英文科を出たのち、水戸高校の英語教授となり、終戦の年に退職した。のち静岡大、日大で英語をおしえた。俳句や中国学を好んだ。

明治・大正期の「うずまき」の翻訳は、以上のとおりだが、昭和期に入ると、昭和六年から同八年にかけて、佐々木直次郎訳『エドガァ・アラン・ポオ小説全集　全五巻』（第一書房）が刊行されるようになり、その第一巻（昭和6）に「メエルストロムの旋渦」が収録されている。このポー小説全集は、箱入りの本であり、背中が皮装のなかなか凝ったつくりである。美本である。いったいに第一書房の本は、つくりがよかった。

数年後（昭和9・6）、岩波書店から、『黒猫　他六篇』（文庫本）が、森村　豊（ゆたか）沢村卓爾（たくじ）の共訳で出され、このなかに「渦巻」がおさめられている。

江戸川乱歩（一八九四～一九六五、大正・昭和期の探偵小説家。本名・平井太郎。早大政経学部卒。はじめポーをもじって、ペンネームを「江戸川藍歩（らんぽ）」としたが、のちに「江戸川乱歩」に改めた）もまた、ポーの「うずまき」を訳し、それを「メエルストロム」と題し発表した。それは『江戸川乱歩全集　13巻』のうちに収められた（昭和7）。乱歩にとって「うずまき」は、「ポーの推理癖を証する作品」であった。いいかえると科学小説であった（「解説」より『世界推理小説大系第一巻　ポー』所収、東都書房、昭和39・4）。

乱歩訳は、独特の趣きがあるものであり、けっしてまずい訳ではない。ちなみに冒頭の一節は、つぎのように訳されている。

メールストローム

神の御業は「摂理」の世界に在りてはもとより、「自然」（なべて）に於いてもまた、吾等人間の工（たくみ）と異なる。神の御業は、その余りに広大無辺にして探るを許さず、吾等人間の之に擬えて作り得べくもあらず。洵、神の御業は「デモクリタスの井戸」よりも弥深し。
ジョセフ・グランビル

私達はようやく、空に懸るその断崖（きりぎし）の上に迹り着いた。老人は始め暫くの間、黙っていた。彼は余りに疲れているように見えた。しかしややあって彼は口を開いた。
「これが三、四年前なら、私は、自分の末っ子と同じ位の元気で貴方をここに御案内する事が出来たでしょう。だが今から約三年ほど前に、およそ人間には到底起るべきでない事――いやよし起ったとしても生き残ってその話を語るというような事の全く有り得ない――そのような事件がこの私の身に起って来たのです。その時私が経験した死にもまさる恐怖の六時間のために私の軀も、精神もすっかり壊れてしまいました。

昭和十四年、谷崎精二訳「メエルストロムの渦」が、新潮文庫『黒猫』のうちに収められ、二年後の同十六年、『エドガア・ポオ小説全集　第3巻』（春陽堂）に、再録された。

終戦後は、各出版物がせきを切ったように街なかにあふれた時期であるが、「うずまき」もそういった潮流にのった読物であった。一般大衆むきに、なかには児童書のように、やさしく訳したものが巷にすがたをみせた。以下、昭和二十年代から同四十年代までの約二十年間のおもな訳業を一覧表にすると、つぎのようになる。

大渦の底	早大教授　谷崎精二	新選世界文学集『ポオ傑作集』大泉書店、昭和22・10。
メエルストロムの渦	谷崎精二	『ポオ小説全集　3巻』のうち。春陽堂、昭和23・?。
メエルストロムの旋渦	日大講師　佐々木直次郎	アメリカ古典文学叢書　II『E・A・ポオ　偸まれた手紙』のうち。共和出版社、昭和23・9。
うずまき	八木仁平	科学大冒険読物『月え昇った男』のうち。新光社、昭和23・8。
うづしほ	森　鷗外	『ポオ　病院横町の殺人犯』のうち。角川書店、昭和24・1。
渦巻	法大教授　田中　準	英米文学名著叢書第11篇『エドガー・ポー　渦巻』広文堂、昭和24・5。
〃	田中　準	英米文学名著叢書第3篇『ポー短篇集　エドガー・ポー』のうち。広文堂、昭和25・9。
メエルストロウムの旋渦	佐々木直次郎	新潮文庫『黒猫・黄金虫』のうち。昭和26・8。
メエルストロム	江戸川乱歩	世界推理小説大系第1巻『ポー』のうち。東都書房、昭和39・4。
メエルシュトレエムに呑まれて	小川和夫	世界文学全集　18『アシャー館の崩壊　黒猫　他』のうち。集英社、昭和45・7。

どの訳業も長短あいおぎなうものであるが、日本語としてみたばあい、さし絵入りの八木仁平訳がいちばんこなれており、読みやすく、学童がよんでもよくわかる。筆者はむかし同書を谷崎精二氏のご子息より贈呈された。ながく愛蔵していたが、いまは大学図書館に収蔵されている。

冒頭の一節は、つぎのように訳されている。

われ〳〵は、やつと、いちばん高い崖の絶頂にたどりついた。老人はしばらくの間、息ぎれがして口がきけないようすであつた。

「ついこないだまでは、この途を案内するのにわしの末つ子にだつて負けたりしなかつたもんですが――」ようやく、老人は口をきつていつた。

「それが、あなた、三年ほど前のことです、どんな人間だつてぶつかつたことがないというひどい目にあいまして、六時間というもの、死ぬような怖しいおもいをしました。おかげで、身も魂もめちやくちやにされました。たぶん、わたしを老人だとおもつておいでしようが、そうじやありません。たつた一日のうちに、まつ黒だつたこのわたしの髪がまつ白になつてしまつたのです。手足がなえ、神經がみだれて、いまじや、身體をちよつとうごかしてもふるえがきたり、ものゝ影におびえたりするのです。こんなちつぽけな崖から下をみおろしても、すぐめまいがしてしまうんですよ。」

八木仁平訳「うずまき」の冒頭

ポーの「うずまき」の本邦初の単行本（昭和24）

「うずまき」を収録した八木仁平訳『月え昇つた男』（昭和23）

あとがき

いつの日にか、文章にまとめ、発表したいと思っていたのが本稿である。しかし、志しとはうらはらに手元に文献資料がないため（すべて処分したため）、まったくお手あげの状態がながくつづいた。が、司書の協力をえて、参照すべき材料がすこしずつあつまり、研究に着手できた。論文にして発表すると世界のだれの目にふれるかわからず、いいかげんなものを書くわけにはゆかぬ。

そうおもうと、筆さきもにぶるが、あえてそのためらいを払しょく克服して発表することにした。わが国の英学徒の論文などは知れたもので、とても英米本国の研究者の批判にたえられぬものが大半であろう。が、日本人しか書けない部分――日本人の独自性が多少行間に現れておれば、海のむこうの大家といえども脱帽せざるをえないはずである。

先にうずまきの生成メカニズムについてすこしふれたが、もうすこしふえんしてみたい。潮汐（海中の干満）――別名・潮（海面ののぼり、くだり）とか、潮流や海流を研究する科学のことを、海洋学（oceanography とか oceanology）というらしい。その内の一分科――ことに潮汐を研究する学問のことを潮汐学（tidology）という（小倉伸吉『潮汐』岩波書店、昭和9・11）。

ノルウェーの北西岸沖に発生するうずまきは、じっさいはそんなに巨大なものでないようだ。わが国の鳴門のうずは、それに匹敵するかどうか、なんともいえない。が、つぎにわが国の文芸作品に現われた〝うずまき〟について語ってみたい。

六　日本の古詩（和歌）　俳句　随筆などにあらわれた「鳴門のうずまき」

いまの呼称〝鳴門〟は、古くは「粟門」といい、「速吸名門」（潮流がはやく吸い込まれてゆく海峡の意）と『日本書紀――神代記』に記されている。

伊弉諾尊（記紀神話に登場する国土をつくった男神）は、亡くなった妻・伊弉冉尊（女神）に会いたいとおもい、死体保管所や黄泉の国で再会するが、その身はけがれたので、粟國（阿波の国――古事記）に出かけ、鳴門のうずしおを見て、身をきよめようと思った。

故、其の穢悪を濯ぎ除はむと欲し、乃ち往きて粟門と速吸名門とを見す。然るに此二門（この二つの海峡の意）、潮既に太だ急し（潮がひじょうに速い意）。

注・原文は漢文。「新編　日本古典文学全集　2　」『日本書紀　①〈全三冊中〉』小学館、平成27・8を参照した。

「阿波志　三　板野郡　山川」に『日本書紀』のこの字句がひかれている。ほかに〝鳴戸〟とか〝鳴渡〟ともかいた。これらの話は、いずれも潮の干満のとき、潮流がはげしく流れ、うずを巻いたとき出る音を表現したものであろう。

鳴門（市）は、徳島県北東部にある町である。平安時代は、〝撫養庄〟〝牟夜戸〟〝牟夜〟ともいったらしい。『万葉集』など、古歌にもたびたび詠まれた。紀貫之の「土佐日記」（承平五年（九三五）一月三十日）に、

夜なかばかりに　舟をいだして　阿波のみと（水門――海峡）をわたる……

と書かれている。うずまきが発生するのは、鳴門海峡（四国――淡路島のあいだに位置）である。この海峡の幅は約一三五〇メートル。徳島県大毛島の孫崎――淡路島南西端の門崎とのあいだをいう。門崎の西方三〇〇メートルに中瀬とよばれる浅い岩礁がある。その東方を〝小落し〟、西方を〝大落し〟という。最深部約九〇メートル。うずまきが生じるのは、幅約九〇〇メートルの〝大落し〟の部分という。

鳴門海峡の潮の流れが急なのは、播磨灘（内海側）と紀伊水道（外洋側）の干満による水面の差が大きいことが原因とされている。外洋の干満時に、播磨灘から紀伊水道に流れる潮を、

落潮（順潮）

といい、満潮時にその逆に流れるものを、

逆潮

という。落潮と逆潮は、六時間で交替する。

急な潮流と〝大きなうず〟がみられるのは、落潮のときという。毎月、大潮（旧暦三月三日ごろ）のとき、うずまきは大きく、水位差は約二メートル。潮の流れは、時速一八キロ。うずは、直径約一〇メートルのものが数個生じ、南へ移動しながら数十秒間つづく（高木秀樹「鳴門海峡」『日本大百科全書　17』所収、平成6・1）。

鳴門の潮流の呼称には、いろいろな表現があり、たとえば、つぎのようなものがそれである。

東　大鳴門……大毛島の東端――孫崎と海峡東よりの中瀬の間。
西　小鳴門（撫養瀬戸の別名もある）……中瀬と淡路島の門崎（鳴門海峡に突出する淡路島南西端のみさき）との間。

この二つをつぎのようにいいかえることができる。

大鳴門……大毛島の孫崎と淡路島の門崎との間（一三五〇メートル）。
小鳴門……大毛島・島田島と四国のあいだ（二〇〇メートル）。

大鳴門は潮流が急であり、約一〇ノットの速さで流れ、大小のうずまきを生む。うずまき見物のための観潮船は、淡路島南端の福良港からである。

鳴門は歌集（中村憲吉［一八八九～一九三四、大正期の歌人］の『軽雷集』ちゅうの「鳴門観瀾記」）や吉川英治［一八九二～一九六二、昭和期の小説家］の小説「鳴門秘帖」の舞台になった所である。鳴門のうずしほは、鳴門公園（駅の北東八キロ）から眺望できるという（『コンサイス地名辞典　日本編』三省堂、八八九頁）。

わが国の古詩に謡われた潮のみちひや梶間（ろやかいをこぐ、その一こぎ。転じてほんのわずかの時間）、潮さい（潮が満ちてくるときの波の大きな音）、波とう（大波）、瀬戸（小さな海峡）などのほか、うずまきに関するものに、つぎのようなものがある。

明石の門ゆ（海峡）は　夕されば　潮を満たしめ　明けされば　潮を干れしむ　潮さゐの　波を恐み　淡路島……（「万葉集」羈旅歌［旅のうた］一首并短歌）

（釈義）明石（兵庫県南部――神戸西部）の瀬戸（海峡）から夕方になると潮がみち、明け方になると、潮が引いてゆく。ひき潮しおのときお

そろしい潮鳴りがするので、淡路島に停泊し、潮をまつ。

室の浦の　瀬戸の崎（みさき）なる　鳴島の　磯（岩の多い海岸）越す波に　濡れにけるかも

万葉集――三一六四。

（釈義）室の浦（兵庫県南西部――揖保郡御津町と君島［鳴島］とのあいだの海峡）の海峡のみさきにある鳴島――その岩の多い海岸に打ち寄せる波によって、体がぬれてしまった。

淡路島　門（海峡）渡る船の　梶間にも　我は忘れず家をしそ思ふ

万葉集――三八九四

（釈義）明石海峡をわたる船が、ろをひとこぎするほどの間にも忘れられぬのは、家のことである。

過流とは、急いよく流れる海流の表面にできる、らせん状に巻き込む海水（うずまき）のことである。潮が流れる方向、潮の速さが著しく異なる境界、潮位差の大きいところに生じやすいという（松井健一『水の言葉辞典』丸善、七五頁）。その類語としては、和語につぎのようなものがある。

うずまき（渦巻）……「滝つ瀬の渦巻ごとに、とめ来れど……」後撰和歌集――一二三九。

うず（渦）……「絞水（うづ）の淵あり。故（かれ）、宇頭川と号（なづ）く」播磨風土記――揖保。

うずしお（渦潮）……「これやこの　名に負ふ鳴戸（なると）の宇頭之保（ウヅシホ）に　玉藻刈るとふ　海人娘子ども」万葉集――三六

注・作者不明。

三八。

注・これがあの有名な鳴門のうずしおに、海草（わかめ）を刈るおとめたちなのだなの意。

また鳴門のうずしおを詠んだ和歌や俳句に、

和歌

冴え来ぬる（寒さがきびしい）冬のしほ風　北吹きて　阿波の鳴門の音そ　はけしき

注・「拾玉集」巻第四　詠百首和歌　海。

わたつみ（海）の　鳴門は龍のかどなれば*　うしほ（海のみず）も瀧と落るなりけり

*水中にひろむ竜が出入りするところ。

注・下河辺長流（一六二六～八六、江戸前期の歌人・古典学者）

聞なれし　見馴し　阿波の鳴門なる　波のさかまく　世にや出なん

注・勝算（一六六四～一七四〇、江戸中期の僧）

俳句

世は鳴戸　暦はづれに　渦もなし

注・素堂（一六四二～一七一六、江戸前期の俳人）

鳴門なる　渦にまかれそ　浦ちどり*

*ちどり科の小鳥。水辺に群れとなって住む。

注・氷花（元禄ごろの俳人。号は露堂）

鳴門のうずしおに関する随筆に、つぎのようなものがある。

鳴　門　　植村政勝

注・（一六九五～一七七七、江戸中期の本草学者）

書き手はいう。日本一の海上。大難所は、鳴門だと。淡路島から阿波へは、船で三里（十二キロ）の行程である。東南の風が吹いたときは船は出ない。西北の風のとき出帆するという。「此所（なると）の潮差引の時分は　大井川の流ることし」という。

鳴　門　　百井塘雨

注・生没年不詳。江戸中期のひと。京の巨商の弟という。安永から天明にかけて諸国を遊歴し、「笈埃随筆」を著わした。文政ごろ没。

海辺に七、八軒の漁村有り。潮時にあらざれば、尋常の海面にして　漁舟そこ〳〵に漁する。かくて潮満べき時来れば、段々に浪騒ぎ水沸出て、渺々たる（ひろびろとした）南海の潮、一同に（みな）はせ入、俄に水渦巻沸返りて、見るが中に南方五六尺渦高くなり、海底鳴動して雷のごとく、両岸是が為に打砕る計り　恐ろしき気色、楫木（かじ）も動揺するかとすさまじ。

……

南の方六七尺高く成りて、真逆さまに北へ落下る事滝に似たり。底より沸潮、さし入潮と戦ひて、岩石砕り計りに轟けり。

鳴　門　　探古堂　黒海

注・文化ごろの大阪のひと。著書に「阿波名所図会」がある。

此門干汐の時は　一方ひく、なりて　一方より落る水滝の如く　満汐の時は　大海より汐みちくれば　瀬あたりて立のぼる浪落れば　こと〳〵く渦となる……

小鳴戸

撫養ノ北、北泊ノ島田山ニ対スル所海峡ヲナス、之レヲ撫養ノ鳴戸ト呼ブ、海汐ノ盈虚（みちかけの意）ニヨリ　潮ヲ生ズ、故ニ此称アリ。

清水吉康著『大日本名所図録　徳島県之部』大阪　大成館　明治37・9。

鳴　門

瀬戸内海に三海峡あり、下関といひ、速吸（大分県東部――瀬戸内海の南西の入口をなす。速吸瀬戸ともいう。潮流最大5.5ノット）といひ、鳴門といふ。鳴門海峡は、流れ殊に急にして異観呈せり。……鳴門は、阿波と淡路との間にあり。水、岩に激して怒り、躍りて走り、この深処に崩落して巨渦（大うず）をつくる。退潮数尺、外洋既に低きとき、内海の水は奮迅して（はげしく、ふるいたつ）この犬牙（いぬのきば）の如き岩礁を衝き、懸りて（上からつるした川）滝となり、鳴って凄然の（ものさみしい）響あり。……旋転盤回して、巨渦、中心に凹窪を作り、渦と相伴ひて之に合し……

友田宜剛編『新編　中等作文教本　巻三』東京書籍、明治45・2。

鳴　門

鳴門は矢張、徳島から撫養に出て、そこで乗合の汽船に乗る方が好いね。それはね、淡路の福良（あわじ島の南西端の港町）の方から舟は出せるけれども（フェリー船がある意）、本当の潮の呑吐する（のみ込む）壮観は、撫養の方でなければ好く見えないからね。

田山花袋の紀行文。『日本名所事彙』所収、育成社、明治43・7。

海の恐怖

＝鳴門と日本文学

池田亀鑑（一八九六～一九五六、明治から昭和期の国文学者。東大教授）は、この表題の随筆のなかで、「太平記」（小島法師の作と伝えられる軍記物語。四〇巻。応安年間［十四世紀］の成立とみられている）にみられる、後醍醐天皇の第一皇子・尊良親王が土佐に流罪になった話に言及したあと、ポーのうずまきにふれている。「メールストウルムは、ノルウェーの西海岸に現はれる有名な渦巻と激流の現象で、鳴門のそれと全く同性質のもののようだ。実際にはこの現象は、ポーの書いたほど大きなものではないらしいが、太平記の文章にもあるように、多少の誇張は文学作品としてやむをえまい」という。

池田がみるところ、ポーは自然科学者的な知性と詩人的人的な空想とをたくみになえまぜて、「うずまき」を作ったという。そしてポーが描こ

うとした主意は、

大うずまきの恐怖
月光が射す神秘な海

であった。

「主人公が乗っていた大きな船は早く沈み、飛び移った円筒形のタルだけは浮び上ってきた。そのスリルを精密な心理描写と合理性によって描破（ママ）している」という。

『読売新聞』（第一二五〇号――昭和31・5・8付）。

四国さかさ巡礼記

ドナルド・キーン（一九二二～二〇一九、アメリカ・ニューヨーク生れの日本文学者。コロンビア大学教授をへて日本に帰化）は、子供のとき、ノルウェーの大渦の物語をよんだという。が、だれの作品でよんだのか、明言していない。が、ポーの「うずまき」のことをいっているのであろう。かれは徳島市から鳴門へ行った。

「子供のときにノールウェーの大渦の小説を読んで、白昼夢（はくちゅうむ）にその恐ろしさ――吸い込まれた船の乗客の悲鳴（ママ）、マストの天辺（てっぺん）が荒波に沈む瞬間――を目（ま）のあたりに想像した」という。

むかしのことなので、物語の細部にも誤解もあるようだ。鳴門海峡を瞰下するのに最もよい丘陵地とみられる鳴門公園において、そこにすえてある望遠鏡で〝うずまき〟をみたが、迫力を感じられず失望したようだ。

「展望台の望遠鏡を渦（うず）の方へ向けると、あるかないか分（わか）らない程の優（やさ）しい渦しか見えなかった。私はがっかりしたが、全体の景色（けしき）を眺めるとその素晴（すば）らしさに見とれた」という。

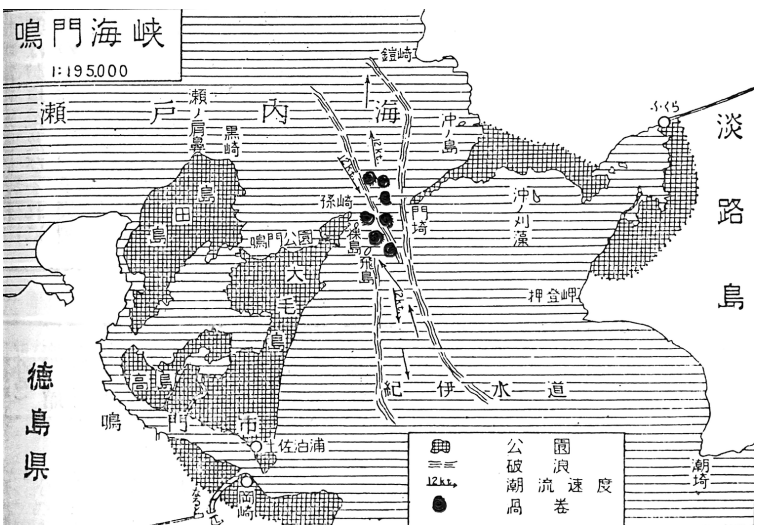
『中央公論』第72年第12号、昭和32・10。

ノルウェーと日本のうずしおの発生箇所。

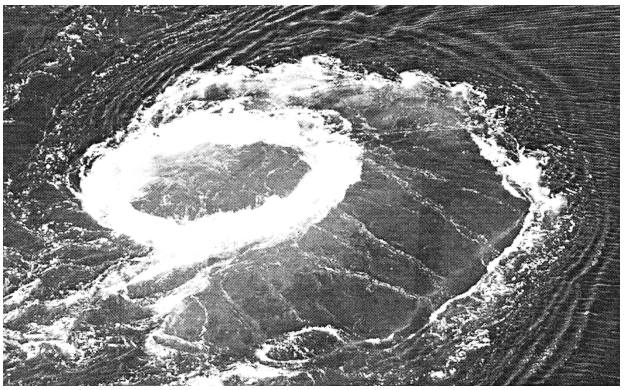
スカンヂナヴィア半島を二分しているのは、ノルウェーとスウェーデンである。ノルウェーは極北の地であり、土地は海岸からにわかに高原に移るため、草木が生えず、人口も産物もすくない。人々はしぜん海に出て漁をせざるをえなかった。ノルウェーは、漁業をおもな産業とした。また山間牧畜により、羊やヤギを飼って副産物とした。

ノルウェーの全海岸は、ゆたかな漁場であり、タラやニシン、カレー、サバ、シャケ、カニが豊富に捕獲でき、五つの主島と無数の小島からなる。ロフォーテン(テ)諸島がその中心という。大小の島は、班(はん)れい岩（黒みかげ石）や片麻(へんま)岩（石英、長石などからなる変成岩）などからなり、サメの歯のようにぎざぎざした

鳴門のうずまき



●は‘うずまき’を示す。
『日本案内記　中国四国篇』昭和30・2より。



ノルウェーの北西岸沖の‘うずまき’。Søk i Store norske leksikon より。

裸岩(らがん)の山
屹立(きつりつ)する崖
恐ろしい岩崖(がんがい)

といった大自然の景色をみせつけている。

これがノルウェーの景観の特徴である。が、いったいノルウェーの‘うずまき’（マスコストロム、モスケンストロム、ムスクストロムなどと呼ぶ）は、どこで発生するのか。その位置について叙したものを年代順にしるすと、つぎのようになる。

鳴門のうずしおがそうであるように、干満時にロフォーテン(テ)諸島の海域において、数箇所おこるようだ。そのうずまきの絵をはじめて地図に書き入れたと考えられるのは、オラウス・マグヌスであり、ついでヘラルドゥス・メルカトルであり、十六世紀のことだった。ロフォーテン(テ)諸島には小さい島が無数にあるが、ヴァスュル Vashul 島とロガナス(ハ) Lóganas 島の中間にうずまきの絵がみられる。もう二つは、本土のムスケネス Muskenes とフウント Fund 島のちかくに一つと、ヴァロ Varo 島とルスト Rust 島の間にもう一つ、計三つみられる。

イギリスの商人兼旅行者アンソニー・ジェンキンソン（一五二九～一六一〇）も、その航海記（一五八九年）において、うずまきにふれ、ロスト(ルスト)諸島 Rost Islands とロフォーテ Lofoote 島のあいだに‘マレストランド’Malestrand と呼ばれるうずまきがあることを記している。これも十六世紀のことである。ノルウェーの牧師兼作家エリック・ポントピダン（一六九八～一七六四）は、あいまいな表現ながら、モスコエストロム Moskoestrom がモスコエ Moskoe 島の近くにある、と記している（『ノルウェーの自然誌』一七五五年）。

『ブリタニカ百科辞典』（一七九八年）は、あまり精密ではないが、緯度六十八度――ノールラント(ド)州のロフォーデン地区――モスコエ Moskoe

島のちかくで発生すると記している。これはポントピダンの記事を借用したものである。これらは十六世紀から十八世紀にかけての記述である。

デンマークの牧師兼作家ジョナス・ラムス（一六四九～一七一八）は、ロフォーテン（テ）のヘルセゲン Helseggen の山とヴェル Ver 島（ヴァロイ島ともいう）の間を、モスコエ Moskoe 島の方から、モスコエ・ストロムと呼ばれる、大きな、恐しい海流がながれている、と報じている。ラムスのこの記事は、『ブリタニカ百科辞典』（一七九八年）に引用されている。

十九世紀になると、うずしおの位置が細かくなる。「マエルストロム Maëlstrom またはマルストロム Malstrom は、大うずである。船乗りたちは、ウェロエン Weroën 島（ヴェルまたはヴァイロ島のことか）とモスケン島のあいだにある、と注意をうながしている。このうずまきは北極海にあり、北緯57度40分、東経11度44分にある」（『ル・マガザン・ウニベルセル』誌（一八三六・四）にのった「ル・マエルストロム」の訳者注を参照）。

二十世紀になると、ベディカー『ノルウェー、スウェーデン、デンマーク』（一九一二年）が、うずしおにふれている。「この島の南端は、ロフォートデン Lofotodden と呼ばれている。そこをおそろしいマルストロム Malstrøm すなわちモスケンストロム Moskenstrøm が流れている。これははげしい潮流であり、漁船にとって危険なものである」（二二三頁）。

日本のうずしおといえば、鳴門のものが唯一であろうが、『日本案内記』（昭和30・2）の地図に、七ヶ所もそれを書き入れている。干満時にあちこちでたくさん発生するということであろう。

日本語の〝うずまき〟に相当する語として、英語には

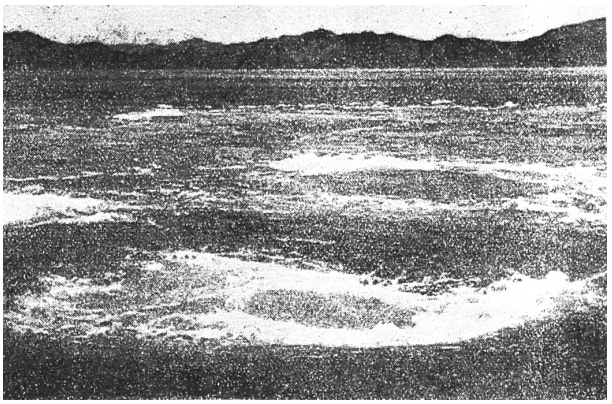
whirlpool（ホワールプール）
swirl（スワール）
vortex（ヴォーテックス）
eddy（エディ）……小さなうずをいう。
maelstrom（メエルストロム）……ふつうノルウェー北西岸沖の大きなものをいう。〝大うずまき〟の意。

などがある。が、鳴門のうずまきは、このうちどの語があてはまるだろうか。

七　〝うずまき〟の発生原因

潮（汐ともかく）とは、月や太陽の引力によって、海水が引っぱられ、水の高さを変わることをいう。が、水位がもっとも高くなるのを満潮、もっとも低くなるのを引き潮という。それはふつう六時間ほどの周期でくり返される。わが国の典型的なうずまきといえば、鳴門（徳島県北東端）のうずである。これは「倭国（日本）第一の瀬戸」という（「日本名所風俗図会」巻之上鳴門）。が、それはどのようにしてできるのか。

満潮と引き潮の高低差で生じた潮流は、中央部を流れるはやい流れと、陸地側のおそい流れとの速度差で回転力がうまれる。これがうずの発生要因であるらしい。水中のうずのようすはどうか。うずは海面の空気を引き込んだとき、白い泡を生む。うずの強い吸引力は、白い竜巻を生んだりするが、一方で引き込んだ水を吹き上げたりする（南あわじ市ホームページ）。



阿波の鳴門のうずまき。対岸は淡路島。原田三夫『自然界の驚異』偕成社より。

徳島県の阿波の鳴門海峡（四国東北端の孫崎と淡路島の門崎とがむかいあった一、三〇〇メートルの狭い海域）は、恐ろしいうずまきができるところとして、むかしから知られている。この海峡では南流の潮流と北流の潮流が、かわるがわるおこるところという。その流れは、時速24キロ。両岸に近いところで、たくさんうずまきが生じる。大きなもので、

直径……一五メートル～二三メートル（『コンサイス地名辞典』、三省堂）
中心のくぼみ……二メートル
うずの音……ごうごうとあたりに響くもの。

うずまきは漏斗（あさがお）形に凹んで輪転する（『日本地理大系　中国・四国篇』改造社、昭和6・9、二七四頁）。

このうずに巻き込まれると、二、三トンの船でも進退の自由をうしない、大小の暗礁（海中のかくれた岩）や岸の岩にぶつかり難船するらしい。鳴門（鳴戸ともかく）の語源は、海が鳴りひびく出入り口（門）であろうか。

うず（渦流）はたくさん起るが、中の瀬（中くらいの流れの意か）で生じ、最高潮のときのものを〝大落し〟、そうでないときのものを〝小落し〟というようである。

ポーが描く海の色は、インキのように黒いもの。大うずまきの帯のそれは白である。その内側は真黒である。これらの形容は、かれがあえて潤色したものである。が、じっさいの海はどんな色をしているのか。既して海の色は、青であることは通り相場である。海は湖や川よりも透明度が高いという。太洋はまん中ほど高く、赤道に近いところはさらに高い。日本の南の沖を流れる暖流の〝黒潮〟の色は、藍色（濃い青）が黒ずんだもの。熱帯の海は、藍青色の美しいもの。〝黒海〟（The Black Sea）は、底のドロが硫化物のために黒いから起った名という（原田三夫『自然界の驚異』偕成社、昭和28・5）。

八　「うずまき」からみたポーの伝言

さいごにポーが「うずまき」を通じて、読者に伝えたかったこと、ねらいは何であったのか。

ポーの『物語』についての論評が、無署名で『アリスティディーン』誌（一八四五・一〇）に出たが、じっさいの執筆者は、ポーその人であるときめつけたのは、G・R・トンプソンであった。ではポーは自作「うずまき」をどのように見ていたのか。かれは自画自讃的にこんな風にいっている。

「うずまき」は何よりもテーマの大胆さをもって有名である。このようなテーマは、だれも思いつかなかったものである。また描写が明快であることでも知られている。

ポーによると、ほとんどの作家は、しごとに取りかかる前に、まずテーマ（主題――作品の中心となる内容）をきめる。それがきまると、テー

マにそって話を展開させるために書き進める。が、ポーがまず考えたのは、テーマよりも斬新な効果をどう生みだすかが先決問題であった。そのあとテーマに移っていった。

すなわち、その場面にふさわしい状況や、音調（擬音など）を新たにつくり出し、それらを作中において利用することである。そうすることによって、効果が出せると考えた。だから効果を生むことに役立たぬ言葉は、すべてすてた。効果の誕生に役立つものは何かとつくづく考えると、それは材料――〝真正（本物）の資料〟であることを知った。つまり作品を生かすも殺すも資料なのである。作品のよしあしを左右するものは、第一に作者の筆力だとすると、第二は材料（資料）が良いか悪いかということである。

ポーによると、英米作家の大きな欠点は、先人の桎（しつ）こくから脱していないことである。先達の考えやことば使いの特性をまね、かれらが踏みならした道を歩いていることである。そこには独創のにほいはなく、あるのは死のにほいである。いっさいの斬新さは否定され、ルール違反は〝ふとどきな異形〟として排除される。

ポーは独創性を第一義に考えた。着想（アイディア）とその組合わせが重要であるとおもった。趣向がとびぬけて新しくないばあい、そのようなものを書くことは、犯罪だとおもった。読者がおもしろ味を感じないような作品は、駄作だと考えた。作家の個性をなすものは、文章の様式――文体（スタイル）であるが、ポーはそれをどのように考えていたのか。

かれはじぶんの文体は、わかりやすく、説得力に富むもの、まじめなものと思っていた。くわしい叙述は、――筋（プロット）――効果――出来事――などの展開にとって必要なもの、作品をおもしろくさせる要因と考えた。その結果、ときに描写がくどくどしくなるのはやむをえなかった。

要するにポーがいいたかったのは、作家は因習にとらわれず、独創の研鑽につとめよ、ということであったのであろう。

むすび

むかしといえば古い話である。が、いまから五〇年以上もまえに、ポーのあしあとをたどる旅に出たことがある。ボストン――ニューヨーク――ボルチモア――フィラデルフィア――リッチモンド――シャロッツビル――ロンドン――スコットランドと、いろいろさまよった。が、いま当時をふり返ると、ついきのうのことのように――、映画の一画面（シーン）のように、一こまずつ、なつかしく想い出される。本稿執筆の直接の動機となったものは、こんにちまで接しえなかった『ブリタニカ百科辞典』（一七九八年）にみられる〝うずまき〟の記事をよんだことによる。ようやく

宿望が達せられ、論文執筆の意欲がかき立てられた。

しかし、参考とすべき資料が手元にまったくなかった。が、大方の協力をえて、新しい材料も少しづつあつまりはじめ、思いのほかスムースに筆がすすんだ。これも泉下のポーの霊威によるものであろう。本稿を大別すると、前半と後半の二つに分けられる。前半㈠～㈣までは、ポーの「うずまき」を切りひらいた研究。作品の形態・構造・作用などを調べた解剖図であり、後半㈤～㈧までは、わが国における「うずまき」の紹介のあとを瞥見したり、わが国の文学作品にあらわれた〝鳴門のうずまき〟について叙したり、ポーの「うずまき」の意義について論じたものである。

日本人にとってアメリカ文学は、外国文学である。国文学に関しては、本国の学者がいちばんすぐれた成果を生むことができる。豊富な資（史）料、豊富な文献に支えられ、また米語が国語ということもあって、原作を味解できる強味を有しているからである。考証的研究にかけては、とてもわれわれ日本人はかれらと勝負になれぬ。ポーが説く独創性というものを考えたばあい、彼我の資料をうまく使い、対照的に研究するのも一つの方法であろう。が、ものをいうのは研究材料（ネタ）である。そうおもってすこしは新味を出すことに努めた。が、ご覧のとおりの結果しか出しえなかった。……

参考文献

地図

Mercator's *Atlas*（一五九五年）

Mercator's *Svecia et Norvegia cum confinys*（一五九五年）ドイツ―デュイスブルク刊

Revd. Erich Pontoppindan 著 *The Natural History of Norway*; in Two parts, printed for A. Linde, London, 1755

注・本書はデンマーク語からの英訳。

J. G. Bartholomew 編 *The International Reference Atlas of the World*, George Newnes, Limited, London, 刊行年不詳。

百科辞典

Encyclopaedia Britannica; or a Dictionary of Arts, Sciences, and Miscellaneous Literature; …… vol.x. Edinburgh, 1798

Søk i Stone norske leksikon, 出版社および刊行年不詳。

雑誌

The Mariner's Chronicle: containing Narratives of the most Remarkable Disasters at Sea, such as shipwrecks, storms, fires and famines: Published by R. M. Treadway, New Haven, 1834

Fraser's Magazine for Town and Country. vol.x. July to December, 1834, James Fraser, London.

注・ここの中に *The Maelstrom*. A Fragment をふくむ。二六七～一八一頁。

Le Magasin Universel, tome troisième. (1835-1836), au Bureau Central, Paris.

注・ここの中に *Le Maelstrom* をふくむ。二二八～二三二頁。

The Aristidean, October, 1845

注・ここの中に E. A. Poe: Review of Tales by Edgar A. Poe をふくむ。

The Journal of English and Germanic Philology, vol. 46, No. 3 3 (Jul., 1947)

仏紙

Democratie Pacifique (1847. 9. 24)

注・ここの中に *Une Descente au Maelstrom* をふくむ。

著作集

The Cameo Edition *The Works of Edgar Allan Poe* in 10 volumes, Funk and Wagnalls Co., 1904

Poe's Tales of Mystery, Imagination & Humour, Ward Lock & Tyler, London, 1878

John H. Ingram 編 *The Works of Edgar Allan Poe* vol. 1 A. & C. Black, London, 1899

Thomas Ollive Marbotte 編 *Collected Works of Edgar Allan Poe, Tales and sketches* 1831-1842, The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, London, England, 1978

James A. Harrison 著 *Biography*, Fred de Fau & Co, New York, 1902

注・これはハリソン版『ポー全集』ちゅうの一冊。

伝記

George E. Woodberry 著 *The Life of Edgar Allan Poe*, personal and literary, vol. 1, Houghton and Mifflin Co., Boston and New York, 1909

Mary E. Phillips 著 *Edgar Allan Poe The Man*, vol. I, vol. II, The John C. Winston Co., Chicago, Philadelphia, Tronto, 1926

Hervey Allen 著 *Israfel The Life and Times of Edgar Allan Poe*, Farrar & Rinehart, Inc, New York, 1934
Arthur H. Quinn 著 *Edgar Allan Poe, A Critical Biography*, D. Appleton-Century Co, New York, London, 1942

書簡集

John Ward Ostrom 編 *The Letters of Edgar Allan Poe*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1948

研究書

Minoru Toyoda 編注 *Prose Tales* by Edgar Allan Poe, Kenkyusha, Tokyo, 1928
Killis Campbell 著 *The Mind of Poe and other Studies*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1933
Léon Lemonnier 著 *Les Traducteurs d'Edgar Poe en France de 1845 à 1875: Charles Baudelaire*, Presses Universitaires de France, 1928

辞書

Sir James A. H. Murray 著 *A New English Dictionary on Historical Principales*; vol. VI. The Clarendon Press, Oxford, 1908

一般書

M. A. Wyllie 著 *Norway and its Fjords*, Methuen & G, London, 刊行年不詳。
仲摩照久編『世界地図風俗大系　第九巻』新光社、昭和5・12。
神宮司庁蔵版『古事類苑　地部　二』吉川弘文館刊行、昭和45・9。
『日本大百科全書　17　』小学館、平成6・1。
小倉伸吉著『潮汐』岩波書店、昭和9・11。
川端康成、伊藤整、吉田精一他　編『文章講座　Ⅱ　文章構成』河出書房、昭和29・11。
原田三夫著『自然界の驚異』偕成社、昭和28・5。
『日本案内記　中国四国篇』日本交通公社、昭和30・2。
鳴門市史編纂委員会『鳴門市史　別巻　鳴門に関する文芸作品集』鳴門市、昭和46・10。
注・これはむかしから世に知られた鳴門のうずまきに関するものを集めた文集である。画集・歌集・句集・詩集・随筆のなかから、〝うずしお〟の記述をひろい集めたもので、中には珍しいものも少なくない。好書である。
松原秀明編『日本名所風俗図会　14　四国の巻』角川書店、昭和56・12。
藤原　博著『英語の構造』大修館書店、昭和59・2。

片桐洋一校注『後撰和歌集』岩波書店、平成2・4。
小島憲之、木下正俊、東野治之校注訳「新編日本古典文学全集　9」『万葉集1～4』小学館、平成6・5～同28・11・
小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正宗校注訳「新編日本古典文学全集　2」『日本書記　①〈全三冊〉』小学館、平成27・8。